

井伊直弼の著述活動と片桐宗猿

——石州流相伝の師系をめぐる——

はじめに

茶人としての井伊直弼の研究は、一九一四年に中村勝麻呂・高橋箒庵編『井伊大老茶道談』^①により、「茶湯一会集」（以下、「一会集」と略記する）をはじめ、「入門記」「閑夜茶話」などの著作が翻刻紹介されたことに始まる。以来、「一会集」は直弼の代表的著作として知られるようになり、茶人としての直弼研究も、この著作を中心におこなわれてきた。^② その評価は、幕末期において形成された「一期一会」「独座観念」などに象徴される直弼の茶道精神は、近世以前の茶道理念を集大成したものであり、近代茶道の胎動と位置づけられるとされ、^③ 現在も揺るがないものとなっている。

その後も茶人直弼については「一会集」を中心として研究が進められてきたが、谷端昭夫氏は直弼の他の著作にも視野を広げ、全著述活動から検討する必要性を述べた。^④ また、井伊裕子氏は「一会集」の草稿段階と清書段階での変化に注目し、著述活動における貴人の強調や、「一期一会」「独座観念」が草稿段階では見られず、清書段階に至り始めて両者が相関的に位置づけられることを述べ、その著述の時

母 利 美 和

期的考察を、彼の政治行動とともに分析する視角を提示した。^⑤ これらの指摘を継承しながら、谷村玲子氏は、直弼研究の研究史を整理し、藤直幹氏がすでに彼の政治行動を考える前提として直弼の茶湯思想を追究すべきとする指摘に注目した。そして、直弼の茶の湯以外の全著述活動の思想的位置づけや、政治行動分析により、彼の茶の湯は自己修養として、内面的な方向へ向かったことを指摘した。^⑥

また、直弼の著述活動を、井伊家に伝来する直弼以外の茶書の全体像や諸道具、他家に伝来した直弼の著作の写本や直弼が実際に関係した茶会記などから検討する動きも近年見られるようになった。^⑦ それは、直弼の著作が流儀・流派を超えた多くの茶書研究の上に成り立っていることが明らかになってきたことや、直弼の流儀の成立および相伝過程を考える上で有効と考えられたからである。

これらの成果により、現在のところ明らかとなってきたことは、おもに次の七点に整理できる。

まず第一に、直弼の茶の湯観形成過程に関する問題である。直弼の茶書における著述活動は、天保七年（一八三六）頃にはじまり、弘化二年（一八四五）の「入門記」による一派創立宣言に至るま

窓で、当時の珍奇名物主義としての「世間茶」の否定を前提としていた。そして、茶の湯修行の有用性について、「諸業」との関わりにおいて、「諸業の助」となりうるという消極的な肯定観（「桐尾みちふみ」）から、政道をあずかる武家こそが「正路（道）の茶湯」を学ぶ必要があるとする「諸業の助」を積極的に肯定する茶の湯観（「茶道と政道」）へ、さらに「諸業の助」を肯定しながらも、それを目的とすれば「茶の道立ちがたし」として、茶の湯を独立した思想として強調する茶の湯観（「入門記」）へと変化した。さらに弘化三年、世嗣として江戸出府以降、家格、身分秩序に規定された武家社会の現実を踏まえ、將軍・諸大名の間に身を置く一大名茶人として通用する、「茶会」における主客の心のありようを重視し、茶会における貴人の位置づけを明確にした茶の湯観に変化した。^⑧

第二に、直弼の著述活動に影響を与えた人物の問題である。従来、「一会集」等の著述過程において、石州流片桐宗猿との往復問答としての「茶湯尋書」が注目されてきたが、それ以前から同じく大和国小泉藩の片桐貞信との交流が、彦根藩の右筆役である真野明美を通じて見られた。また、真野を通じて片桐貞信の著作や他の茶書の収集をおこなっており、千家流茶書に関しては彦根藩士の荒居善長の集書を受け継いでいた。^⑨

第三に、直弼の一派における相伝構想の変化の問題である。相伝の前提には、「入門記」による一派創立宣言があるが、直弼が「桐尾みちふみ」などの茶論書以外に、弘化元年頃から相伝のための茶書の執筆に従事しており、当初十五〜十六件であった構想は、のちに三十四件、三十七件、四十三件、四十七件と拡大していることである。これ

らの変化をもとに、個々の茶書の執筆時期を検討することにより、頼あき氏は、弘化期・嘉永期・安政期の三つの段階を想定した。^⑩

第四に、「一会集」の執筆時期の問題である。従来、「一会集」の執筆は、片桐宗猿への「茶湯尋書」との関係から、その年代が判明する嘉永二年（一八四九）から安政四年（一八五七）頃を中心と推測され、「一会集」の完成は、安政三年から同五年の間で諸説が見られた。しかし、年未詳であった「茶湯尋書」原本の年代推定をおこなうことにより、片桐宗猿との問答は、嘉永元年冬頃から嘉永二年の十一月頃、安政三年八月頃から安政四年六月頃までに限定され、この間に六年余の空白時期があること、また「一会集」の写本の奥書から、少なくとも安政四年八月までに執筆を終えていることが確認され、ほぼ安政四年六月から同年八月の間に完成したことが判明した。この空白時期については、直弼の政治行動と関係づけて理解する説が有力である。^⑪

第五に、直弼の著述内容の問題である。直弼自作の茶書には、「当流茶事稽古次第」に記載される「初十箇条」などの点前稽古相伝の茶書以外に、「一会集」「茶湯をりく草」など、茶湯の具体的点前ではなく、茶会に臨む心得や精神を中心に述べた茶書や、「茶湯みちしるべ・懷石弁」など初学者向けに、茶会に関する基本的な心得や、懷石作法を述べたものも見られる。また、稽古相伝の茶書が未完成のものも多いのに比べ、心得の茶書や、初学者向けの茶書がほとんど完成を見ていることに特徴があり、直弼がこれらを優先的に完成させた形跡がある。^⑫

第六に、直弼が関係した茶会の問題である。とくに自会記は、直弼

が確立させていった茶の湯体系を、彼がどのように実践したのかをうかがう上で重要である。直弼が関係した茶会は少なくとも二百会を超えており、安政三年から同五年にピークが認められること、また安政二年以降、養母耀鏡院や息女弥千代など身内の女性が参席する茶会が見えること、安政四年十月以降、「毎会水屋帳」「順会水屋帳」など、直弼側近の家臣を中心とした茶会が始まることなどに特徴がある。^⑭

第七に、直弼の一派創立による伝授の問題である。この問題は茶名(茶号)授与の時期や、茶書の書写実態が重要である。前者については谷端氏により嘉永六年から安政四年にかけて十三名(他に時期不詳が四名)が例示されているが、あくまで使用例としての史料上の上限であり、授与の時期の確定は未解決である。^⑮後者については、家臣の宇津木三右衛門家・大久保小膳家・三浦十左衛門家(以上はいずれも直弼の側役を勤めた家)、茶道役大橋家などに伝来した書写本が確認されているが、現存する写本の実態からは、書写の対象は「当流茶事稽古次第」「入門記」「身之曲尺手続之書」「初十箇条」「一会集」に限られており、^⑯相伝体系全体からみればごくわずかであること、伝授の段階から言えば、入門から初心の時期のものに限られることが指摘できる。

これらの成果を踏まえ、本稿では、とくに第一・二と第四の問題を中心に、以下の観点から再検討をおこないたい。

まず、直弼が弘化二年に「入門記」を記して一派創立を宣言するために、石州流の誰から相伝を受けたかである。近世後期の石州流は完全相伝制を採っていたと考えられており、流儀の皆伝を受けた者は新

たに一派を成すことが許されていたが、直弼が弘化二年以前に誰から流儀の伝授を受けていたかは、未解明のままである。従来の説では、直弼が幼少の頃から鼓の教授を受けた高安彦右衛門や石州流の片桐貞信の門人で彦根藩の右筆役でもあった真野明美との関係が指摘されているが、いずれも皆伝を裏付ける史料は確認されていない。片桐宗猿との「茶湯尋書」の存在により、江戸出府後の直弼は、宗猿に師事した事実が強調され、案外この「入門記」の前提となる皆伝の問題が見落とされてきた観がある。

つぎに、江戸出府以降、直弼が何故片桐宗猿に師事したのが問題である。「入門記」以前から直弼が宗猿に師事し、宗猿から皆伝を受けていれば全く問題はないが、現在のところ、弘化二年以前に直弼と宗猿を関係づける根拠は見出せない。

これらの課題を解明するため、次の順序で検討を進めていく。まず、第一に片桐宗猿との「茶湯尋書」の年紀がない部分についての年代推定と、それ以降の直弼の茶の湯のあり方、第二に「茶湯尋書」と直弼の著述活動との関係、第三に直弼への相伝関係を明らかにすることにより、直弼の茶湯における著作活動を流儀相伝の師系の観点から位置づけてみたい。

一 片桐宗猿との「茶湯尋書」

井伊直弼と片桐宗猿との「茶湯尋書」については、すでに全文が活字翻刻されているが、^⑰以下に述べるように年代推定に誤りが見られた。また、井伊家史料の目録である『彦根藩文書調査報告書』^⑱においても、厳密な年代推定はおこなわれていない。井伊裕子氏もこの「茶

窓 湯尋書」に着目し、これらを直弼自身が書写し編集した「宗猿先生茶道聞書」や「茶道聞書 上之巻」「茶道聞書 下之巻」の分析により、

「一会集」執筆との関係や、現存する「茶湯尋書」以外のものの存在、相伝の正当性などを指摘したが、年代推定は具体的には行っていない。筆者自身も年代推定を試みたことがあるが、分析対象史料の見落しなど、初歩的誤りがあった。これらの年代推定は、直弼の茶の湯観の形成から完成へいたる過程を分析する上で基礎的な作業と考えられるので、本章では「茶湯尋書」と直弼の著述活動との具体的関係を検討する前提として再検討しておきたい。

分析対象は、①井伊直弼が片桐宗猿に宛てた茶湯問答の還返状の原本十三通（本稿では「茶湯尋書」と呼ぶ）、②直弼が「茶湯尋書」の控えとして書写したと考えられる「茶道聞書 上之巻・下之巻」（本稿では「聞書控」と呼ぶ）、③直弼が「茶湯尋書」の内容を分類整理し編集清書した「宗猿先生茶道聞書」（本稿では「聞書清書」と呼ぶ）である。

1 「茶湯尋書」の交信時期と「聞書控」

まず、「茶湯尋書」と「聞書控」との対応関係を明らかにし、「茶湯尋書」の年代比定をおこなう。本稿末尾に掲載した表Ⅰ「茶湯尋書一覽」は、「聞書控」の上之巻・下之巻をもとに、各簡条を記載順に一番左の「番号」欄に番号を付して配列したものである。左から二番目の「清書」欄は、「聞書控」と一致もしくは関連する「聞書清書」の簡条を、「聞書清書」の記載順に番号を付した数字を示している。例えば、冒頭の「番号」欄の「01」の場合、「聞書控」では一番目の

簡条であるが、「聞書清書」では十番目の簡条に位置づけられていることを表す。次の「条文頭書」欄は、「聞書控」に記載される条文の冒頭部分を略記したものである。「聞書清書」では文章表現が簡略化されているものがある。次の「引用箇所」欄は直弼の他の著述への引用や関連条項を示したが、この部分の分析については次章でおこなう。最後の「茶湯尋書」との対応関係「欄は、「聞書控」と「茶湯尋書」の対応関係を示したものである。野線による前後の区切りは、「茶湯尋書」が現存する場合は、その一通分の区切りを示しており、現存しない場合は、一通もしくは複数の「茶湯尋書」が存在した可能性がある。

そして、表Ⅰをもとに「茶湯尋書」と「聞書控」の上之巻・下之巻との対応関係のみを整理したものが次頁の表Ⅱである。左欄の「上下通番」は、「聞書控」の上之巻・下之巻の通し番号を示している。右欄内に記した○内の数字は、分析の便宜上付した「茶湯尋書」の通し番号である。

まず、この表Ⅱから分かることは、「聞書控」の上之巻では「茶湯尋書」の各一通ずつに記載された簡条配列を替えずに、そのまま書写されていることである。つぎに、月日の記載のある③から⑧までの「茶湯尋書」の間隔は、ほぼ一か月であることがわかる。さらに、干支や閏月から、ほぼ嘉永二年と推定できる⑤・⑦の「酉」、⑧の「閏四月」に注目すると、その月日の順序は錯乱が見られないことがわかる。つまり、「聞書控」は直弼が片桐宗猿との「茶湯尋書」での交信順に、一通ずつ簡条配列を替えずに書き留めたものであり、しかも「茶湯尋書」の交信頻度は、約一か月と一定間隔であったと推定でき

表II-① 「聞書控」上之巻（嘉永期）

上下通番	「茶湯尋書」との対応関係
1～17	①現存せず（嘉永元年10月中旬頃） * これらは複数回の尋書の可能性もある。
18～22	②井伊22632：年月日未詳（嘉永元年11月中旬頃） * №18～22迄、5ヶ条全部を収録。
23～32	③井伊22631：年末詳12月15日付（嘉永元年） * №23～32迄、10ヶ条全部を収録。
33～50	④井伊22627：年末詳正月19日付（嘉永2年） * №33～50迄、20ヶ条の内18ヶ条を収録。
51～70	⑤井伊22598：西2月17日付（嘉永2年） * №51～70迄、20ヶ条全部を収録。
71～90	⑥井伊22628：年末詳3月21日付（嘉永2年） * №71～90迄、20ヶ条全部を収録。
91～99	⑦井伊22608：西4月17日付（嘉永2年） * №91～99迄、10ヶ条の内9ヶ条を収録。
100～109	⑧井伊22626：閏4月16日付（嘉永2年） * №100～109迄、10ヶ条全部を収録。
110～129	⑨井伊22633：年月日未詳（嘉永2年5月中旬頃） * №110～129迄、20ヶ条全部を収録。

表II-② 「聞書控」下之巻（嘉永期）

上下通番	「茶湯尋書」との対応関係
130～155	⑩現存せず（嘉永2年6月中旬頃）

表III 「聞書清書」（安政期）

清書番号	「茶湯尋書」との対応関係
156～165	①井伊25630：年末詳11月21日付（安政3年） 包紙上書「茶事尋書」
166～186	②井伊25350：已正月12日付（安政4年） * 関連資料：井伊25315（控） * 尋書には、180の後に「一風炉ニて夜の点前…」の一条あり。
187～199	③井伊25353：已2月21日付（安政4年） * 包紙上書「已二月廿一日出、同三月廿七日着、△茶道尋書、内二ヶ条再問すへし」 * 尋書には、195の後に「一夏ハ平茶碗……」の一条あり。
200～214	④井伊25349：已4月26日付（安政4年） * 関連資料：井伊25351（包紙上書「已四月廿六日出、万事尋之下書」）
215～224	⑤井伊25629：年末詳6月8日付（安政4年）
225	⑥現存せず。 * 「茶湯亭主心得書」の寸法と同じ。

る。かりに、この推定に従うと、②は③の一个月前で嘉永元年十一月中旬頃と考えられ、①は複数の「茶湯尋書」の交信があった可能性もあるが、少なくとも嘉永元年十月中旬頃には、直弼と宗猿との問答が開始されていたことになる。また、⑨については⑧の一个月後の嘉永二年五月中旬頃と推定できる。

つぎに、「聞書控」の下之巻は、上の巻と同様の体裁・装幀で記載されているが、二十五箇条分を筆写するのみである。⑩に該当する「茶湯尋書」が現存しないため、あくまで推測であるが、⑩を筆写した段階で、直弼と宗猿との間でのやりとりが、中断もしくは何らかの

変化が起こったことが想定される。

2 「茶湯尋書」と「聞書清書」

表Iに示したとおり、「聞書清書」は「聞書控」とは異なり、「茶湯尋書」の各箇条の内容を、何らかの意図により分類整理し、配列を並べ変えて編集していることがわかる。また「聞書控」に記載された箇条の内、「聞書清書」では十五箇条分が削除されていることが確認できる。この削除部分は、「聞書控」では該当箇条の下部空欄に「△」の符合が見られること、また炉に関する箇条の下部に「炉」の墨書を

付した部分が二箇所確認されることなどから、直弼は「聞書控」を分析しながら分類整理をおこなった形跡がある。しかしながら、「聞書清書」には分類を示す見出しなどはなく、直弼がどのように分類基準を設けたかは、今後の検討課題である。

ただし、例えば、第一から第三箇条は「石州三百箇条」や石州流本家での茶事についての概念、第四から第七箇条は「遠州」「織部」など他流における流儀と石州流との異同について、第八から第十四箇条は、「風呂(炉)」の際の点前作法などについて、第十五から第二十一箇条は席中の飾りつけについて、第二十三から第三十箇条は「花」に関すること、第三十一から第三十四箇条は茶会における衣服・携帯物についてなどのように、「聞書清書」は宗猿との「茶湯尋書」を単に問答の記録としてではなく、のちの利用も考慮に入れ、関連する箇条をまとめて配列しようとした意図が読み取れる。

ところが、この分類整理による配列順序は途中で終わっており、表Ⅰに見るように、第百五十六箇条以降は、部分的に「茶湯尋書」の箇条を削除している場合があるが、ほぼ記載順に筆写していることがわかる。「聞書清書」の第百五十六箇条以降を、表Ⅰをもとに「茶湯尋書」との対応関係のみを整理したものが5頁の表Ⅲである。これによると、月日の記載のある①から⑤までの「茶湯尋書」の間隔は、③から④の二か月余を除けば、ほぼ四十日前後であることがわかる。さらに、えとの判明する②から④は、「巳」の年、すなわち安政四年と推定できる。さらに、この一定間隔で宗猿との問答が繰り返されたと思定すると、①は②の約四十日前であるから安政三年の十一月二十一日と考えられ、⑤は④の約四十日後の安政四年六月八日のものと考えら

れ、⑥は一箇条のみであり「茶湯尋書」も現存しないが、さらにその四十日後とすると安政四年の七月下旬頃となる。

すなわち、「聞書控」に筆写した部分を嘉永元年十月頃～同二年五月頃にかけてのものとすると、第百五十六箇条以降は安政三年十一月～同四年七月頃にかけてのものであり、この間に約六年半の空白時期があることが分かる。まず、ここでは直弼が宗猿との「茶湯尋書」の交信を嘉永期から安政期にかけて継続的にこなっていたのではなく、二つの時期に一定間隔で集中していたこと、なんらかの事情により中断していた交信が安政三年十一月頃に再開されたこと、しかも、その最後は安政四年中であり、安政五年四月に直弼が大老に就任する以前に終了していることを確認しておきたい。

3 交信間隔と空白時期

さて、つぎに問題となるのは、前節までに見てきたように、嘉永期と安政期の「茶湯尋書」の交信の間隔に約十日間のずれがあることである。その原因は、直弼自身の環境の変化や、宗猿の返書の間隔にあると考えられる。

そこで、両時期の直弼の行動を検討してみよう。嘉永元年は、直弼はまだ藩主に就任しておらず、十二代井伊直亮の世嗣として基本的に江戸に居住していた。藩主直亮は暇を得て在国しており、直弼は直亮の名代として十月二十六日に江戸を出発し相模湾警衛を巡察し、十一月八日に江戸に帰着した。嘉永二年はすべて在江戸であった。一方、安政三年には、直弼はすでに藩主に就任しており、五月までは江戸にいたが、五月十六日に暇を得て江戸を出発し、五月二十七日に彦根

着、翌安政四年八月十七日に出府のため彦根を出立するまで在国していた。この行動を「茶湯尋書」の交信時期と対照すると、嘉永期のものはすべて直弼が在江戸、安政期のものはすべて在彦根であることが確認できる。江戸と彦根間の飛脚日数は三日間以上であるため、往復は少なくとも六日間以上かかる。つまり、嘉永期と安政期の交信間隔のずれの原因の一つは、この両者居所の距離の問題であった。

また、安政四年と推定される已二月二十一日付「茶湯尋書」の包紙上書「已二月廿一日出、同三月廿七日着、△茶道尋書、内二ヶ条再問すへし」との記載によれば、直弼が宗猿に送ってから返書が届くまでに三十七日間を要しており、江戸と彦根との往復飛脚日数の六日間を除いても約一か月を要している。つまり、この日数のみで、すでに嘉永期の交信間隔に相当していることになる。このときの簡条数は十三簡条とそれほど多いわけではないので、齢八十に達していた宗猿による返書作成にかかる日数が、嘉永期より延びている可能性もある。ただし、この「茶湯尋書」の返事が届いてから、次の質問状を直弼が発信するまで約一か月を要しており、直弼の側にも延引の事情があったとも考えられる。^②

つぎに、交信の空白時期について検討してみよう。この問題を考える上で、まず解決しておかねばならないのは、「聞書清書」の第一から第百五十五簡条の内、表I—③に示した十六簡条である。

これらは該当する「茶湯尋書」が現存せず、月日の記載がないため、嘉永期の最後か、安政期の最初のものなのか判然としない。しかし、この部分は、嘉永元年から同二年にかけての「茶湯尋書」を筆写したと推定される「聞書控」に記載されていないことから、この部分

の「茶湯尋書」は嘉永期のものである可能性は低い。ただし、「聞書清書」に記載され、しかも嘉永期の部分と同様に内容分類により配列整序がおこなわれていることから考えれば、直弼が「聞書控」をもとに内容分類をおこなうことにより、「聞書清書」を編集しようとした初期段階には存在したと考えられる。あくまで推測の域を出ないが、かりに直弼が「聞書清書」の編集を企図したのを安政三年頃と仮定すると、この部分を「聞書清書」の第百五十六から百六十五番の「茶湯尋書」の約四十日前に位置づけ、安政三年十月上旬頃に比定することができる。

それでは、つぎに「聞書清書」の編集の開始時期を、別の角度から検討してみよう。直弼が、なぜ約六年半にも及ぶ宗猿との交信の空白時期を置いて、「茶湯尋書」を再開したかが問題である。まず、この空白時期の前後を含め、直弼の行動を概観してみよう。

嘉永二年三月二十六日、藩主井伊直亮の在国により、直弼は養父直亮の名代として、また幕府溜詰席大名家の一員として江戸での政務に携わることになった。そして、同年閏四月にはイギリス船マリナー号が来航、同年十二月には、幕府は異国船打払令復活を予告し、諸大名に防備強化を命令するなか、相模湾警衛に従事していた彦根藩は、その対応に迫られていた。この頃には、すでに直弼と宗猿との「茶湯尋書」による交信は途絶えている。

翌嘉永三年二月五日には彦根藩の江戸上屋敷が類焼する災難があり、直弼も手元の書物類の大半を焼失しており、兵学書や茶書の多くを失った。^③さらに、同年三月頃から在国中の養父直亮が病状がちとなり、八月頃さらに病状が悪化、九月二十八日ついに病死した。養父直

窓 亮の喪が明けた、嘉永三年十一月二十一日、直弼は直亮の家督を相続し、ついに彦根藩主となった。あらたに藩主となった直弼は、新藩主就任にともなう諸儀礼をこなしたり、前藩主治世中の課題を解決すべく藩政改革に着手し、嘉永四年三月に相模湾警衛地を巡見し、五月二十六日には、初めて藩主として国許に就封した^⑤。

彦根での直弼は、藩校弘道館の改革や領内巡見など精力的に藩政改革を進める。翌嘉永五年五月には江戸に参勤するが、間もなく六月になると、アメリカ東インド艦隊が来航し幕府に開国を要求するとの情報 オランダからもたらされ、八月には溜詰席大名にもアメリカ使節来日の予定を報告した。そして、翌嘉永六年五月には暇を得て六月朔日に彦根に帰着するが、その四日後の六月五日、直弼の彦根在国中に、ついにアメリカ艦隊が来航し、その後は幕府内の対応に迫られた。この報せをうけた直弼も、七月十三日には彦根を出立して江戸に取り返し、事態解決にむけて溜詰席大名の中心となり、幕府の諮問に応えたのである。また、安政元年には、これまでの相模湾警衛、江戸羽田・大森警衛に続き、京都守護の大任を命じられ、その直後には禁裏御所炎上という大惨事に見舞われ、翌安政二年には禁裏造営助役を命じられている。

また当時の幕府内部の政治状況を概観すると、安政元年、ペリー再来航の際、幕府の外交処置に不満を持った斉昭が海防参与から退いた後、反斉昭派の閣老との意見不一致に悩む阿部正弘は、斉昭と協議の上、安政二年（一八五五）八月四日、反斉昭派の老中松平乗全・同松平忠優を罷免、同年八月十四日には、徳川斉昭を幕政参与に再任し幕政改革を実施しようとした。直弼は、この報せを彦根で聞き、「捨身

興業之御深慮」により自ら戒名を記し、位牌の永代供養を信頼できる家臣に依頼し、幕府の御用召しに従い八月十七日、急遽参府のため彦根を出立した。直弼は死を覚悟し、斉昭派との対決姿勢を見せたのである。

以上のように、嘉永二年から安政三年にかけての直弼は、めまぐるしい自身の境遇の変化、度重なる災害や対外的危機の急迫、幕府内部の対立激化など、課題山積の最中であつたことが窺える。このような状況のなかでも、直弼が全く茶の湯から遠ざかっていたわけではないが、この間、現在確認できる藩主就任後に直弼が関与した茶会の記録では、嘉永四年に一回（内直弼亭主一回）、嘉永五年に四回（内一回）、嘉永六年に六回（内同五回）、安政元年に一回（内同一回）、安政二年に十五回（内同六回）を数えている。しかし、この時期の回数 は、その後の安政三年に四十回（内同十一回）、安政四年に五十六回（内十一回）、安政五年に三十九回（内同五回）、安政六年に二十三回（内同無し）、安政七年は二月までで八回（内同無し）と比較すれば、かなり少ないことが分かる。^⑥ とくに安政五年四月二十三日以降は、直弼が大老職に就任し、幕政の激務を抱えていながらも、ある程度の茶会に関与していることを考えれば、嘉永四年から安政二年の間は非常に少ないともいえよう。宗猿との「茶湯尋書」の空白時期は、直弼にとっては藩主の代理、そして新藩主として、前藩主への批判的精神から善政への意欲にみなぎった時期であり、茶の湯についての思索に集中出来る時期ではなかったと考えられる。

そんな直弼にとって、安政三年五月から翌年八月までの暇による在国期間は、しばし江戸から離れるとはいえ、安穩とした日々ではな

ったはずである。むしろ、これが最後の在国となる可能性も想定していたであろう。直弼の宗猿との「茶湯尋書」による交信再開は、このような状況下に直弼の在国中に始まった。「聞書清書」も、おそらくこの在国中に開始されたと推測され、「聞書清書」の表―③に示した十六箇条は、安政三年十月上旬頃に比定することが妥当と考えられる。

4 「茶湯尋書」の終了と「御流儀」の完成

(一) 稽古茶会の開始と流儀披露の茶会

直弼は安政四年八月二十八日、江戸着府後しばらくすると、十一月朔日から、掠原主馬・三浦内膳・柏原与兵衛・宇津木六之丞・宇津木幹之進ら直弼の側近グループによる「毎会」の茶会を始め、さらに、十二月三日には、杉原惣左衛門・柏原徳之進・青木順蔵・掠原木工・三浦義太郎ら、直弼の側近予備軍グループともいえる小姓らを中心に構成される「順会」の茶会を開始した。

これらの茶会は、それぞれ「毎会水屋帳」「順会水屋帳」として記録され、「毎会」の発会は直弼が亭主を務めたが、それ以外では基本的に家臣が順次亭主を務め、直弼を正客、他の家臣を相客とする限られたメンバーによる茶会であり、いわば稽古茶会と考えられるものである。おそらく、これら稽古茶会は、その開始時期から推測すると、直弼の「一会集」の完成を契機として企画されたものと考えられ、直弼が創始した「当流」による茶の湯は、稽古相伝のための伝書整備による点前作法の確立の段階から、「一会集」の完成により、直弼によ

る新しい流儀としての「当流」による実践の段階へ進んだのである。その流儀は、「入門記」において一派を宣言した当時と比較すれば、基本的精神は引き継いでいるが、嘉永元年以来、宗猿との「茶湯尋書」による問答により補強改変されたものであったといえよう。ちょうど同じ時期、直弼を亭主とした次の茶会が連続して行われている。^④

安政四年十一月二十七日、正客 片桐宗猿

相客 玉井玉瓢庵・片桐宗牛

詰 小縣清庵

安政四年十一月二十八日、正客 前津山藩主松平齐民

相客 高橋栄徳

詰 鈴木春波

二十八日の茶会は、前日の片桐宗猿を迎えた茶会と同じ道具組であった。しかも茶会后、居間において玉井玉瓢庵が炭手前をおこなった。片桐宗猿が薄茶を点てた、いわゆる「披間」における後段の茶であった。^④これらの茶会について、谷村玲子氏は、松平齐民との交会の意味を、同年十一月二十六日、つまり連続する茶会の直前におこなった溜詰席大名らと幕府に提出した積極的な開国意見具申と、同年十二月十六日の松平齐民の中将昇進とを関連づけ、通商許容派である松平齐民との政治的関係のための茶会ではないかと推測した。^④しかし、直弼の茶の湯が茶会における「茶」に対する主客の心の対話を重視しているとするならば、直弼があえて何らかの政治的目的により茶会を催したとする谷村氏の推測は肯首しがたい。

また、戸田勝久氏は「披間」における後段の茶に注目し、茶の湯の

「不可思議」を指摘した。^②直弼は、この茶会のおよそ一か月前、初冬（十月）に「披間之弁」を著し、「今世流布之教寄者、茶湯をもよふすに、懷石濃茶すめへ、御退屈にも候はんとて、披間ニうつり、薄茶点し、或ハ酒肴、蕎麦切やうのものなと出す事も有りとぞ、利休かたて置たる、草庵の清風ニハそむける事にて、実ニ歎息之至りなり」と、当時の茶の湯における茶会後の「披間」での後段の茶を批判し、「実意の茶湯をいたされ、客もまた得道の茶人ならハ、披間の事努々おもひもよらすかし」と否定し、師とあおぐ片桐宗猿に意見を求め、「此御書之意味御考之通御座候、私義御同意ニ付奥書仕候」との奥書を得たのであった。戸田氏は、ここでの「不可思議」の含意を具體的には示されなかったが、その直弼が、敢えて師宗猿を招いての茶会に「披間」を設けていたのには、むしろ「不可思議」ではなく、それをおこなう積極的な意図があったと考えられる。

あくまで推論であるが、一つの可能性としては、直弼が安政三年五月から安政四年八月までの在国中に完成した、「一会集」等により体系化した自らの新たな流儀を、それまで幾たびも示教を仰いできた師宗猿に披露する内祝いとしての、いわば祝賀茶会の意図があったのではないだろうか。正客が宗猿、相客は玉井玉瓢庵と片桐宗牛と、片桐宗猿の関係者と思われるが、詰は直弼の門弟であり、彦根藩の奥医師でもある小縣清庵（号宗石）が勤め、直弼の流儀での茶会が円滑にすすめられるよう配慮されていた。玉井玉瓢庵については詳細は不明であるが、片桐宗牛については、宗猿の妻女であり、嘉永五年頃から直弼の勧めにより彦根藩の江戸屋敷奥向きにおいて、直弼の養母耀鏡院や奥女中らに石州流の茶の湯を教授した「鉄」の可能性が^③ある。この

点については後述する。

これらの主客による茶会は、直弼を亭主として直弼の流儀にしたがった茶室における前段の茶会、そして後段には、場所を替え「披間」において、流儀完成の祝賀の意をこめて宗猿が薄茶を点てるという趣向を想定できよう。宗猿は前段の茶会において、祝賀の意であろうか、「高砂」と銘した自作の「花入一重切」を持たせており、箱蓋裏には「高砂や此浦船に帆をあけて、翁と姥とのむかしたつねん」と記されていた。「宗牛」が宗猿の妻「鉄」であるとなると、宗猿と宗牛の老夫婦が揃って、直弼の流儀を祝うという趣向であろう。また、直弼も当日の道具では、茶入に古備前肩衝を用いるなど、いたって侘びの道具立てのなかに、「下條長兵衛寿字」の薄茶器面取を用い、下條長兵衛家の末裔である宗猿に対する敬意を示したと考えられる。

それでは、二十八日の松平斉民を正客とする茶会はどのように位置づけられるであろうか。花入（石州作一重切）・茶入（古信楽）・茶杓（利休作）以外は、前日と同じ道具立て、しかも「披間」については「居間向、すべて前日ニかはる事なし」と、前日の宗猿を正客とする茶会の跡見会の様相である。松平斉民は、茶号を宗予といい、当日も幕府茶道役の高橋栄徳・鈴木春波が相伴しており、石州流の茶事に通じた人物と考えられる。

直弼の茶会記においては、嘉永六年（一八五三）の三月六日と四月二十七日と、早い段階に二回とも正客として記されている。また、直弼が安政四年頃に著したと考えられる「茶道下留」^④には、松平斉民が直弼を招いた茶会における前礼として、「○松平越後守宗予茶事之文写、奉書堅結び文也」と題する書状のやりとりが、次のように書き留

められている。

① 尚々、前後御礼之義ハ御断申上置候

一筆奉呈候、其後ハ御無音申上候、扱ハ明後五日正午粗茶申度候、為御案内、恐々謹言

四月三日

宗予（花押）

△ 澍露軒君

宗予

玉炉辺

② 右返翰

尚々、前後御礼之事御丁寧被仰下、拝語仕候、昨日は客来中御答延引、御海容希上候、以上

朶翰拝読候、如貴論従是も御無音打過、不本意至リニ候、然は、明五日正午御茶可被下候条、千万辱奉存候、乍染参上可仕候、右御答如此御座候、恐々謹言

卯月四日

澍露軒
宗観（花押）

△ 宗予君

澍露軒

貴酬

③ 又同所より之文

尚々、前後御礼之義は御断申上置候

一筆奉呈上候、不順之处、愈御清栄に大賀候、扱は御兼約ニ付、

明後九日正午粗茶申上度、為御案内、恐々謹言

五月七日

宗予（花押）

△ 澍露軒君

宗予押

御風炉辺

①と②は、同じ茶会における往復書簡であり、「其後ハ御無音申

上」と松平斉民が述べることから、直弼と何らかの関係を持って以来、しばらく書信を通じていなかったことがまずうかがえる。また、③には「御兼約ニ付」と記しており、斉民は兼ねてから直弼との茶会の約束をしていたことがわかる。直弼が斉民を招いた記録は、安政四年十一月を除けば、嘉永六年の二回のみであることから、直弼と斉民の茶事における交際が嘉永六年頃に始まると仮定すると、この①から③の往復書簡は、いずれも直弼が斉民を招いた茶会の後に交わされていると推測される。つまり、①・②は三月七日の茶事の約一か月後であり、①の文中の「其後ハ御無音申上」とは、直弼主催の茶会の後、音信がしばらく途切れたことを言っているのではないか。また③は、四月二十七日の直弼主催の茶会の十日後であり、この茶会において、今度は松平斉民が直弼を招くことを「兼約」していたと推定できる。では、なぜこの往復書簡を直弼は書き留めたのか。前述の通り、直弼が関与した茶会は二百会以上を数えるが、それらの茶会に関係する書簡の内、直弼が書き留めたのがこの三通のみであり、しかも松平斉民とのものだけである。これらのことより、あくまで推測ではあるが、直弼の江戸出府後、松平斉民は茶事において早い段階からの直弼の理解者であり、なおかつ直弼にとって、茶事において他の大名とはことなる特別な位置を占めていたと考えておきたい。とすれば、宗猿を招いての直弼の新しい流儀完成を披露した「祝賀」茶会の翌日、直弼は斉民を招き、師宗猿に披露した茶会を同様の形式で示し、その完成を互いに喜び合ったのではないだろうか。二十七日の道具立ての中で、花入・茶入・茶杓を替えたのも、二十八日の茶会は、たんに跡見としての茶会ではなく、斉民に対する敬意と考えておきたい。

以上のことを、当時の直弼が関与した、この両日の茶会に前後する茶会の状況からも検討してみよう。^⑤

安政四年八月二十七日、直弼は彦根から江戸に到着し、上府に際しての幕府や老中たちへの報告などの諸儀礼を済ませ、十月六日には桜田の上屋敷で茶会を催しているが、その茶室は「新席」とされ、新たに造作されたものであった。直弼は、安政四年の五月二十六日の彦根在国中の茶会でも、「新建館」の茶室で側近の家老や側役を招いた茶会を催しており、彦根・江戸の両地において茶室を新設していたことになる。十一月十一日には正午に「表席」で、同月二十六日には「花月亭」において茶会があり、十一月朔日に直弼の側近たちとの稽古茶会として「毎会」の茶会が開始された。同月五日にも二回目の「毎会」茶会が催された。十一月七日になると、直弼の息女弥千代を亭主とした茶会があり、正客は「奥」と記されることから直弼の正室昌子である。相客は奥女中の藤川・長尾・喜瀬野、詰には宗牛の名が見える。^⑦同月二十四日には、ふたたび「新御席」において鶴見軍平を亭主として、直弼を正客に、弥千代・奥女中らとの茶会が催された。^⑧この三日後に先の宗猿を迎えた茶会、四日後に斉民を迎えた茶会が営まれ、十二月一日の三回目の「毎会」茶会を経て、十二月三日には直弼の小姓を中心とした稽古茶会である「順会」が開始された。十二月五日には、四回目の「毎会」が行われた。そして十二月七日には、直弼が亭主、正客は養母耀鏡院、相客は女中むつ・くに・増尾、詰は宗牛という茶会が催されている。^⑨十二月には、その後も茶会が多く、十日・十四日・十六日・十八日・十九日・二十六日・二十七日と続いている。

つまり、直弼は自身の流儀の完成に向けて安政三年から安政四年の在国中に、精力的に「一会集」をはじめとする茶書執筆に専念する一方、彦根・江戸ともに「新建館」または「新席」などの茶室造作を指示し、江戸に帰ってから最初の茶会をその「新席」でおこなうなど、流儀完成を予め想定した準備をおこなっていたことがうかがえる。また、その後、十一月には少なくとも七回（内、直弼亭主は三回、直弼正客は三回）、十二月には十一回（内、直弼主催は三回、直弼正客は八回）もの茶会に関係しており、直弼がいかに精力的に自身の流儀の実践をはかっていたかがわかる。そのような状況の中で、直弼が彦根藩関係者以外を招いた茶会は、さきの宗猿・斉民の茶会のみであり、直弼が流儀完成を披露しようとした意図は十分に想定できよう。

(二) 「鉄」と「片桐宗牛」

つぎに、安政四年十月から十二月の茶会の内、十一月七日と、丁度一か月後の十二月七日の茶会について検討してみよう。この両茶会には、いづれも詰の位置に「宗牛」の名が見えている。宗牛は、十一月二十七日の宗猿を招いた茶会に相客として名を連ねていた片桐家関係者であることがすでに指摘され、戸田勝久氏は片桐宗牛については、片桐宗猿の息男「片桐鋏五郎」と推測している。^⑩この両日の参席者の構成と「宗牛」との関係に留意しながら再検討する。

まず参席者は直弼を除き、その呼称から、いずれも井伊家奥向きの女性であると推測される。なかでも、十二月七日の茶会に養母耀鏡院と同席した「増尾」なる人物は、『井伊大老茶道談』に収録された、耀鏡院の侍女竹内増尾のことと考えられる。^⑪侍女増尾の記憶が正しい

とすると、夫直亮に先立たれ心のよりどころを失っていた養母耀鏡院に対し、直弼は嘉永五年のある月に茶の湯を勧めた。その指南役として片桐宗猿の妻「鉄」に依頼し、奥女中たちも耀鏡院のお相手として稽古をし、ほぼ「鉄」から伝授を受けた頃、直弼の一派の「御流儀」が完成し、それからは、その「御流儀」にしたがい茶の湯をおこなうことになり、直弼からその茶書を見せてもらい筆写し、耀鏡院に差し上げ、奥女中たちもこれに倣って茶の湯をおこなうようになったという。事実、直弼の関係した茶会において、安政二年頃から直弼の側室「しつ」「さと」をはじめ、直弼の家族や奥女中たちが参席する茶会が頻繁におこなわれており、安政二年三月十三日に藩医である中島宗達を亭主として六畳広間の「御席」でおこなわれた稽古様の茶会では、正客を直弼とし、次客に「於鉄」の名が見えており、この人物が侍女増尾の伝えた宗猿の妻「鉄」と考えられる。

また、この「鉄」なる人物は、片桐宗猿・門弟らの関係した安政年間のもとされる茶会記にも登場している。たとえば、次の二回の参席者を参考に検討してみよう。

① 正月廿二日 時 亭 村井広三郎

客 山本半之丞・片桐宗猿・玉井四郎五郎・石渡忠七郎・柴田藤兵衛・片桐梧秋・田宮宗幻・片桐かね・上野はな

② 二月七日正午 時 亭 石渡忠七郎

客 村井広三郎・玉井四郎五郎・片先生・柴田藤蔵・沼左仲・片桐梧秋女・上野花女・片桐兼女・田宮宗幻

①・②とも、呼称から男女同席の茶会と考えられ、①の茶会の「片桐かね」と②の「片桐兼女」は「かね」の訓読が共通することや参列

者の構成から同一人物と推測され、「片桐梧秋」も女性であることがわかる。また、「玉井四郎五郎」は、安政四年十一月二十七日の茶会に宗猿・宗牛と同席した「玉井玉瓢庵」の可能性がある。さらに、これらの人物関係から、この片桐宗猿・門弟らの茶会は「宗牛」が詰の位置を占めた十一月七日と十二月七日の茶会と、そう遠くはない時期のものと考えられる。

これらの状況から判断すると、「宗牛」の人物比定に関しては、次の三点を指摘できる。第一に、直弼の息女弥千代を亭主とし、また養母耀鏡院を正客とした両茶会の参列者はいずれも井伊家内部の奥向き女性たちであり、その場合、彼女らを指導したとされる「鉄」が、彼女らの後見として詰の位置に同席するのが自然であり、戸田氏が指摘した、「増尾」が語ることのなかった宗猿の息男「片桐鉄五郎」が同席することは却って不自然であること、第二に、これら①・②の茶会に同席した片桐梧秋は女性であり、宗猿の息男ではないこと、第三に、宗猿は安政年間初めにはすでに齢七十代後半に達していたが、戸田氏が確認された祥雲寺の過去帳によれば、宗猿の息男も安政四年には二十八歳と考えられ、宗猿から流儀相伝を受け「宗牛」の茶号を名乗っているのなら、宗猿・門弟の一連の茶会にその名が見えないことは不自然なことである。

以上の理由により、十一月七日と十二月七日の両茶会に見える「宗牛」は、片桐宗猿の息男「片桐鉄五郎」とするよりも、「鉄」と同一人物である可能性が高いのではないかと推測する。

さらに大胆な仮説が許されるならば、この両茶会は、直弼の江戸帰府後、新たに完成した「御流儀」に基づき稽古を重ねた茶会を、直弼

窓の家族および、長年の間、家族の茶の湯指南を行ってきた「鉄||宗牛」の後見のもとで披露する茶会であったとも考えられ、さきに見た宗猿・斉民との「祝賀」茶会と一連のものと思われる。

二 「茶湯尋書」と直弼の著述活動

直弼の茶の湯に関する著述活動は、弘化二年の「入門記」による一派創立宣言に前後してはじまり、嘉永期および安政期の段階へと経過するにしがたい拡大していった。この著述活動の内、嘉永期以降のものは、宗猿との「茶湯尋書」による交信と深い関係があることがすでに指摘されている。本章では、前章での「茶湯尋書」の年代推定をもとに、直弼が「茶湯尋書」により、著述活動のどの段階で何を宗猿に確認しようとしていたのか、また、嘉永期・安政期の直弼の著述活動と関係が深い「閑夜茶話」や「茶道下留」など、稽古相伝の伝書以外の著述と「茶湯尋書」の関係について検討をおこなう、直弼の著述活動における「茶湯尋書」の意義を再検討したい。

1 「茶湯尋書」の著作への引用関係

表Ⅰにおける「引用箇所」欄は、「茶湯尋書」の質疑応答と直弼の著述との引用関係や関連部分を示したものである。直弼が最終的に構想した伝書は四十八件であるが、現存するものは二十一件であるため、表Ⅰでは「茶湯尋書」の各箇条の引用関係等を網羅することは不可能と考えられるが、現存するものから出来る限り関連著述を抽出し記載した。ただし、記載文言が厳密に一致しないものや、著述に採用・不採用を問わず抽出しているため、あくまで目安として見ていた

表Ⅳ 「茶湯尋書」と直弼著述の関係頻度

著 述 名	嘉 永 期	安 政 期
「入門記」	一回	なし
「初十箇条」	五回	五回
「身之曲尺・手続之書」	なし	一回
「石州流長板九段書并飾替秘事」	一回	なし
「無盆唐物点等五種手続之書」	二回	なし
「真懷石」	一回	なし
「炭之書」	三回	なし
「灰之書」	二回	一回
「廻り炭・廻り花・花月三式書」	一回	なし
「茶湯一会集」	三十二回	八回
「茶湯をりく草」	十三回	十回
「閑夜茶話」	三回	三回
「茶道下留」	八回	五回

だきたいが、著作別に関連頻度を示すと表Ⅳのとおりである。

これによると、嘉永期に比べ安政期には、関連著述が「初十箇条」「一会集」「茶湯をりく草」「茶道下留」「閑夜茶話」などに限定されていることがわかる。なかでも、直弼の一派創立宣言の原点である「入門記」に関連する質疑が嘉永期にも見られること、従来の指摘どおり「一会集」「茶湯をりく草」は両時期とも頻度が高く、同時平行して執筆がおこなわれたと考えられ、また嘉永期の質疑の多さは、その執筆における基本的構想が、この時期に形成されたことをうかがわせる。

しかし、意外ではあるが、稽古相伝の伝書として「当流茶事稽古次第」などに「入門記」の次に掲げられ、相伝の茶書としては早い段階で完成していたと思われる「初十箇条」について、嘉永期のみならず

安政期にも五回の質疑応答がおこなわれていることが注目される。また、「一会集」「茶湯をりく草」をはじめとする直弼の著述活動の備忘録的役割を担っていたと考えられる「閑夜茶話」や「茶道下留」の記述についても、両時期にわたり質疑応答が確認される。

これらの傾向から、嘉永期は直弼が自身の茶湯流儀に則した相伝茶書の全体像を模索しながら、精力的に著作活動を行っていた時期と考えられ、安政期には、ある程度の構想がかたまり、質疑の内容も絞っていったと見られる。

それでは、嘉永期および安政期の具体的な質疑内容の中での特徴を検討してみよう。

2 石州流茶書に関する問答

まず、直弼が宗猿に「茶湯尋書」の初期段階で質疑したものと推定した部分の中で、次の第九箇条に注目したい。

○平点規範・刀自袂・溪風余談・逆流玄談・和泉草、右等之書類相用可然哉、

答、初四通り之本宜敷書ニハ候得共、私方ニ而者余り相用ひ不申、和泉草ハ専相用申候、
(傍線筆者)

直弼は、近世中期の石州流茶人である大口樵翁の著書「平点規範」「刀自袂」「溪風余談」「逆流玄談」と、近世前期の石州流茶人である藤林宗源の著書「和泉草」について、参考とすべきかを尋ねたが、宗猿は、大口のものは良本ではあるが私方にてはあまり用いない、しかし、「和泉草」はよく用いると返答した。大口の書物の内、「(交會)平点規範」と「溪風余談」は、「一期一会」や「独座観念」など

の直弼の茶の湯観の確立に影響を与えたものと考えられている。また「刀自袂」も直弼自筆の写本が井伊家に伝来することから、直弼が重視していた書物と見られる。おそらくこれらの書物は、直弼が宗猿に質疑する以前から参考としていた書物と見られるが、宗猿への質疑の初期段階で、これらの書物の有用性を確認したものと考えられる。

具体的には、「平点規範」は「一会集」の「懷石中 かよひ 客給様」の項に一回引用されるが、

又平点規範ニ、客上戸ならハ大盃を持出すといふ事あり、是ハ論するに不足、
(傍線筆者)

と、傍線部分のように否定した。

つぎに、「溪風余談」は「一会集」の「中立」の項に一回引用箇所が見られ、

溪風余談ニ、浅露地鳴物ハ無用也、深き露地たりとも敬客ニハ用捨あるへし、雪中・月夕・雨中、露地ニ風情ある時節ハ鳴物を打へし云々、此説も又前の説ニ同しく、茶道の本意ニいたらざる也
(傍線筆者)

と、傍線部分のように、やはり否定的に引用された。「茶湯をりく草」にも一回引用箇所が見られ、「雨中会」の箇条で、

溪風余談ニ、軒下ニ水次・湯桶・手桶などに水を入レ出すへし、三斎翁は雨中ニ椀端ニ水瓶、唐金か南京物ニ水を入レ出されし事さあり、ケ様之時は塵穴を水門ニ用る事もあり、さる故ニ穴の際に平よき石一ツ置事也、亭主軒下へ手水廻し置候間、御一人く御手水候へと挨拶してもよし、客は一人く会釈して手水ニ立つへし

窓と、肯定的事例として取り上げられた。

「逆流玄談」では、「茶湯をりく草」の「正客差支ニ而代客来臨之茶湯」の項に引用され、

一主君正客の時、差支有之、代りとして来臨の客ニハ秘蔵を出すと云へとも、名物一ツは不出残し可置、重而主君御入之為なり、御使者ニ来儀之仁にも右之心得也、たとへ茶湯不案内たりとも、略する事なくもてなすへし、其始終を主君江咄し申さるゝものなれハ也、是、逆流玄談ニあらはす処、尤なる説なり、（傍線筆者）と、肯定された。

「刀自袂」では、「茶湯をりく草」の「独客会」の項に、一刀自袂と云書ニ、婦人ハ老人・若きともに、男たるものひとりハ呼へからず、男も又同く、素書といふ文ニも、嫌ニさかり疑ニさかるといふ事あり、其事ならぬニ、夫そともうたかはれん事を忌ミて也、又李下の冠、瓜田の沓という諺もありと云々、此独客の一会ニ左様のひかみなとハ聊になき事なれと、初心の為あつき教なれハしるし置也

と、肯定的に引用されている。結果的に見れば、二箇所です定的に用いられたが、直弼は必ずしもこれら大口樵翁の著書を肯定的に見ていたのではない。従来から指摘されるように直弼の「一会集」における「一期一会」と対をなす言葉「独座観念」は、草稿段階では大口の「余情残心」が引用されていたことからうかがえる。

これに較べ、宗猿が「専相用申候」と評した「和泉草」の場合は、「一会集」に二回、「茶湯をりく草」に五回に引用箇所があり、いずれも肯定的に記されていることが特徴である。「閑夜茶話」におけ

る「和泉草」からの引用箇条も、次の①～④の四箇所が確認され、直弼が宗猿と「茶湯尋書」による交信を始める以前から、「和泉草」を通読していたことがうかがえる。

①一昔ハ富者・貴人も侘たる者まで茶湯執心あれハ、目を懸、同座して呼つ呼れつ隔なかりし也、然るニ近代ハ貧者・不肖の人ニたとへ茶湯の熱心ありともよせず、誠ノ道ハかけたる風情なりと、藤林宗源なけきたり

②一一説ニ、絵ニハ賛なきを吉とす、絵を見る人の心折合せんか為也、さんあれハ自然絵と詠人の心と相違する事も有れハ也、宗源^(賛)之書ニ出る

③一ふくさものと云ふハ、悪しふくさきぬといへるか伝来のよし、宗源の書ニも出せり

④一藤林宗源云く、茶湯初心ニても富貴ニして名物所持すれハ、功者の様ニ用る也、又功者同学有れとも、一種も不持貧賤の者ハ、人数ニせず無念之至り也と、前ニモ同シ様な文アリ

なかでも①は、「一会集」の「茶湯約束之事、前礼」の項の末尾にある「相客吟味之事」の箇条に引用され、「和泉草曰、むかしハ富者・貴人も侘たる者ニも、茶の湯執心あれハ、目を懸け、同座して呼つ呼れつ隔なかりし也、近代ハ貧者・不肖の人に茶の湯執心あるもよせず、誠の道ハかけたる風情なりト云々、宗源の時さへ如此、近世の茶人能々可心得」と、藤林宗源の考えを肯定的に捉えている。ただし、この部分は「一会集」の草稿段階では見られず、清書段階で加筆されたものと考えられる。

また、「一会集」の「着服 并ニ懷中物」項の「一下着・儒伴・下

帶・足袋まで改め清むへし、尤足袋ハ寒暑ニかゝはらず用ゆる事古法也」ではじまる箇条の注記に、「他流ニ、炉ニハ足袋を用、風炉ニハ足袋を不用、自然風炉ニ早く上ケ候節ハ、迎ニ出るニモ単物を着足袋を不用、是を見て客方も足袋を脱くと云事可笑の至りなり」と、他流での「風炉ニハ足袋を不用」との説を否定し、さらに「和泉草ニ曰、夏ハ汗あり、冬ハつめたし、尤之説也」と記し宗源の説を肯定した。この部分は、「一会集」草稿では「和泉草ニハ、夏ハあせあり冬ハつめたしとて」とのみ記されており、清書段階で「尤之説也」と強調したのである。

「和泉草」は、流祖片桐貞昌の直門弟である藤林宗源の著書であり、「閑夜茶話」に書き留められていることから直弼自身も宗猿との交信以前から注目していたとみられるが、宗猿からの「和泉草ハ専相用申候」との回答により、かれは「和泉草」の説の妥当性を確認し、「古法」への回帰による作法を、「当流」＝直弼の流儀と位置づけたといえよう。

これら大口樵翁の著述四書および「和泉草」は、すべてが石州流であること、しかも宗猿との「茶湯尋書」の初期段階で見られることは、当時の直弼が著述活動をおこなう上で、尾末屋敷時代からおこなってきた自身の流儀としての著述活動に何らかの疑問があったのである。直弼が流祖片桐貞昌の「源流」を正した上での自流としての「当流」を確立するための根拠として、貞昌の自著である「石州三百箇条」は根本であった。しかし、「入門記」にも記すように、その解釈をめぐって各門弟が多くの注釈書を著して、諸説一致していないのが現状であった。直弼は、どの説が貞昌の真意なのかを探る根拠を、

これら後代の石州流茶書に求めようとしていたのであろう。その際、直弼は、宗猿が貞昌以来の流儀を相承していると考え、彼に流祖貞昌の自著以外で信用に足りうる茶書を宗猿に確認したと考えられる。

ただし、直弼の流儀形成において、彼が大口樵翁の著述四書をいつ頃から注目しはじめたかが問題となる。これについては「閑夜茶話」における引用関係の解明が重要である。

3 「閑夜茶話」に関する問答

「閑夜茶話」は、直弼が諸書から書きためてきたもので、その起筆は弘化元年頃と考えられている。従来から直弼の茶書研究の過程を考える上で重要とされてきた。その各箇条には「喫茶余録」のように典故が示される場合もあるが、典故が明記されていない例も多く未解明な部分が多い。この典故の全体像についての解明は今後の課題である。ここでは、「閑夜茶話」と「茶湯尋書」、および直弼のおもな著述との関係について検討しておきたい。

「一会集」には「閑夜茶話」からの引用箇所が二十七箇所、「茶湯をりく草」には十九箇所、「灰の書」には一箇所が確認され、直弼が茶書著述を進める上で、直弼自身が編纂した「閑夜茶話」を活用している様子が窺える。ただし、「閑夜茶話」の説をそのままの引用したわけではない。直弼自身が疑問に感じたことは、これらの説を引用する上で、不明な点を「尋書」により確認していたのである。「茶湯尋書」では、「聞書控」の第四十九・八十三・百十八箇条、「聞書清書」の第七十・百九十二・百九十九箇条の六箇条に「閑夜茶話」の説に関係するものが確認される。

その内、「聞書控」の第四十九箇条は、冬の寒天における手水鉢の水をぬる湯にする作法に関するものである。直弼が、「寒天之節つくはいへ湯を出す事、ぬる湯ニいたし候とも、又寒気の節ぬる湯にてハさめやすけれハ、熱湯を出し置、是を手水鉢へうめ用候様いたし候と申も一理あり、如何」と尋ねたところ、宗猿は「程能湯を湯桶へ入出し申候、熱湯出候はあしく候」と返答している。直弼の問いかけの内、熱湯を出しておき、客がこれで手水鉢の水を埋めてぬる湯にして用いる作法は、「閑夜茶話」に書き留められた次の箇条を踏まえたものである。

一山田宗篇ハ寒天のせつ手水鉢のかたはらニ湯桶ニ湯を出す事、にえ湯を出すといへり、其故は寒気のせつなれハ湯さめ安けれハにえ湯を出し置て、客手水鉢の水溜りへその湯をうめ合てもちひよとの事也、此にえ湯出す事宗篇ニかきる事也 (傍線筆者)

この逸話は、千家流の山田宗篇の作法を記したものであり、「一会集」において、次の二箇所の注記で引用している。

「露地掃除并水」

他流ニ熱湯を出し置き客方ニて手水鉢の水をうめ合遣ふと云事、不勘弁の客ニハあふなき業ニて不好といへと、他流へ行きての心得ニ記置

「初入、主客挨拶」

他流ニ熱湯を出すあり、是ハ手水鉢の水溜りへ能程ニうめ合せつかふ事のよし、此義不好事なれと、他流へ客ニ行たる時心得居されハ甚気遣敷事なれは記し置

いずれも、他流での作法なので心得として記す旨が示されている部

分であるが、二度も同じ引用を繰り返す例は、「一会集」では他に見られないものである。この作法について「不勘弁の客ニハあふなき業ニて不好」または「此義不好事」と当流では用いないしながらも、他流の作法を否定している訳ではなく、この作法の存在を知らなければ大事にいたることを初学のものへ周知するため、わざわざ繰り返し記したのかもしれない。

ところで、ここで留意すべき点は「閑夜茶話」に記される傍線部分の記述である。傍線部によれば、直弼は「閑夜茶話」にこの山田宗篇の作法を書き留めるに際して、すでに「此にえ湯出す事宗篇ニかきる事也」と、石州流ではおこなわない宗篇独自の作法であることを了解していたように見える。しかし、この箇条に続いて「閑夜茶話」に書き留めた、宗篇の作法についての次の二箇条を見てみよう。

一宗篇の書ニ風炉ニて御茶可申と有時ハ、時節不相応なりとも足袋をはかすして参るへし、風炉とも不知参たるときハ、露地ニ入、雪隠の戸あけ置たらは、風炉の茶湯と心得て腰懸ニて足袋をぬき入へしと云々、ふるくハ有ましき事ニ覚ゆ、又風炉の時ハ茶入ニても棗ニても袋へ不入と云、是も一派ニかきる事なるへし

一宗篇云く、立炭といふ事心得、此炭仕舞候ハ、客早く立よとの事か、始終炭三度ニ成てくとし、濃茶済て薄茶ハ書院ニて可進と申ときハ、今一度炭見申度由云て所望〔ス〕へし、是ハ一度より炭を見されハ也と云々、是も一派ニかきりたる説歟

(いずれも傍線は筆者)

傍線部分のように、直弼は宗篇の説に対しての批評を推量または疑問の表現で示している。これに較べ、「にえ湯」の箇条は断定的に書

いてはいるが、宗猿への質疑にも「にえ湯」を出すことに「一理あり、如何」と述べるように、必ずしも直弼がこの作法を全く否定的に捉えていたわけではない。「茶湯尋書」では、その疑問を敢えて宗猿に確認したものと考えられ、直弼は宗猿の説に従い、直弼の「当流」では不採用とした上で、他流での茶会に参席した場合の心得として注記したのであろう。

以上のことから、三百二十箇条余を数える「閑夜茶話」の本文の大半を書き終えた、後から四十一番目にあたるとこの箇条は、直弼が宗猿に対して「茶湯尋書」での質疑する嘉永二年までには、書き留められていた可能性が指摘できる。すなわち、「閑夜茶話」の記述には部分的に行間や紙面の余白に書き込みがあり、弘化元年の起筆後、末尾まで書き終えた後にも加筆があることが確認されるが、一通りの本文は、宗猿との「茶湯尋書」が始まる頃には完成していたと推測される。

また、直弼は嘉永期の茶書著述に際して、それ以前に書き留めておいた「閑夜茶話」の逸話について、石州流の流儀にあるかどうかを宗猿に確認しながら進めていたことが裏付けられる。

直弼は、この他にも流祖宗関に関する逸話や言説について、ほぼ信頼されていると思われるものについても、あらためて確実な根拠の有無を宗猿に尋ねている。たとえば、「聞書清書」の第七十箇条の場合、茶の湯の服装に関するものである。直弼が「石州流ニ服之伝と申事有之候哉」と尋ねたのに対し、宗猿は「茶の服ニ習ひ有之候」と返答したが、この質疑は、「閑夜茶話」に記された「閑師壁書のうとし」と題する流祖宗関が書き残したと伝えられる次の九箇条の壁書の

内、第七箇条目「一茶之服能々可心得事」を踏まえたものと考えられる。

壁書

一茶道ニ心懸有者、親族貴賤之差別不可有事
一此道ニ志有もの、自讃嫌他不可致事

一吾師ハ勿論たとへ他流の人たりとも、祖たる人の作意趣向承及候事とも能見能聞、其所作をよく心得候事、乍然まねをせよといふニはあらず自身の可為心得事

一草庵の諸具、露地・懷石ニいたる迄、分限相応ニ可仕事

一茶湯約束の日、無断遅刻不可有事

一湯相火相大切な事

一茶之服能々可心得事

一草庵其外の諸具ニ心を用ひ候も、みな茶一服のためなれば、呉々も心得可申事

一茶の湯は平生可心懸之肝要也

丁酉九月

片石判

「一会集」でも「着服 并ニ懷中物」の一項が設けられているように、直弼は茶会における服装も重視し、女性の服についても「刀自袂」の説を採用しながら言及するなど関心が高いことが知られている。じつは、「茶道下留」にもほぼこれと同文の「閑師壁書写」と題するものが書き留められており、直弼はこの壁書の記述を重視していた^④。また、直弼の流儀における稽古次第を記した「当流他事稽古次第」の「奥之伝五ヶ条」の中にも、「一石州伝来 服之伝 同書」と掲げられ、「当流」における奥伝の伝書の一つに位置づけていた。こ

窓
のような流祖宗関が書き残したものであるものでも、その内容についての具体的な根拠があるかどうかを、宗猿に確認しようとしたのであろう。

4 茶の湯観に関する問答

つぎに直弼の茶の湯観、とくに彼がすでに「入門記」に記していた事項に関する質疑について検討する。

直弼は、青年時代の茶の湯に対する思索の中で、「世間茶」の否定を前提として、茶の湯修行の有用性について「諸業の助」となる消極的肯定観から、政道をあずかる武家こそが「正路の茶湯」を学ぶ必要があるとする「諸業の助」の積極的肯定観へ変化した。そして「入門記」にいたって、「諸業の助」としての効用を肯定しながらも、次のような一文を末尾に記し、「諸業の助」のみを目的とすれば「茶の道立ちがたし」として、茶の湯を独立した芸道思想として強調する茶の湯観を確立した。

夫れ当道入學の修行は、水を汲み塵を払ひ、屢々手練の功を加ふ、是れ修行の常体也、其の中に心を接して、諸業の助けと為ること前に説が如し、然れども諸道の助と而已、一片に思ふ則は、又た喫茶の道立ち難し、虚従り実に入るは、茶の一道也、此の茶の一道有ることを知て、他学の道理を交へず、我意を離れ、茶の一道に合はんと欲して、篤く志を發する者は、入門して道に進むこと速なるべし、若し此の意に戻る者は、入門の所詮無く、却て道の妨げと為る、故に我門に入るを許さざる也、
右入門の初學心得の爲め、其の主旨を記す者然り、（傍線筆者）

この茶の湯観は、直弼が弘化二年に江戸出府してからも維持し続けたと考えられるが、嘉永二年と推定される「酉四月十七日付」の「茶湯尋書」の第九十九箇条では、宗猿に対し次のように尋ねている。

○本家ニハ石州之茶事ハ専ら武ト申唱候、此事宗関先生之本意ニ者背キ可申与存候、元來茶者茶之一道有りて、茶か武ニ而可有道理者無之事ニ候、但し武士たるものゝ致候業者、万事ニ付おのつから武ヲ離レ不申、是又自然之道理ニ候、強チ茶ヲ武ト申成してハ、茶道相立不申事与存候、此事如何、（傍線筆者）

直弼の疑問点は、石州流の「本家」では、流祖片桐貞昌（宗関）の茶事は「武」であると主張しているが、それは「宗関先生之本意」に背くのではないかという、武士としての茶の湯のあり方を問うものである。直弼の主張は、傍線部のように「武」のための「茶」と考えれば、「茶道相立不申事与存候」と「入門記」に宣言した自説そのものであった。これに対する宗猿の下札による回答は、「御尋之通り御尤ニ存候」というものであり、直弼の主張を肯定した。

もちろん、直弼は「入門記」執筆にあたり、それまでの茶の湯研究により自身の茶の湯観を新たに創造していた考えられる。にもかかわらず「入門記」の核心部分を宗猿に確認するのは、何らかの理由があったと思われるが、少なくとも、直弼が「入門記」執筆前に宗猿から直接教えを受けていなかった証左と考えられる。この直弼が質疑の中で疑問とした、石州流の「本家」とは誰かが問題である。これについては次章で詳述する。

つぎに、「聞書清書」の第百九十九箇条は「万里一条鉄」に関する質疑である。直弼は「万里一条鉄」の語を「入門記」にも記してお

り、その語の持つ意味を熟知していたと考えられるが、あえてその由来について「流祖石州万里一条鉄之語を以て茶事の極意とせらるゝ事は、皆人知る処也、右ニ付石州直筆伝書ニても有之哉」と流祖宗関の「直筆伝書」の有無を尋ねた。

これに対し宗猿は、「宗関ハ大徳寺玉室和尚の禅弟子ニ相成候節、玉室和尚万里一条鉄と書て此意をさとり候へと申時、宗関筆取て、なにこともおもはてくらす面影に、むかひてもまた何かおもはん」と答ければ、玉室和尚は「にて禅意ハさとれたり、茶の極意も如是と申されたり」と返答した。宗猿の答は具体的な「直筆伝書」の所在を示すものではないが、玉室宗瑤から与えられた公案「万里一条鉄」に対し、宗関が「なにこともおもはてくらす面影に、むかひてもまた何かおもはん」との答えを示した由来を確認したのである。

直弼は、この宗関が玉室からの公案の答とした和歌と「万里一条鉄」の関係についてはすでに承知しており、「閑夜茶話」にも次のような箇条が見られる。

一片桐関師像大徳寺芳林庵ニ在之、為持らるゝ所の笏の銘自書のよし、依而今像之上ニ是を写

なに事もおもはてくらす面かけに

むかひても又なにかおもはん

萬里一条鉄

従五位下石見守片桐源貞俊入心源禅師籌室蒙賜法名三斎宗關

三十四歳

時寛永十孟秋日

すなわち、直弼はこの大徳寺芳林庵にある流祖像が手に持つ「笏の

銘」について、「自書のよし」という伝聞の根拠を宗猿に確認しようとしたのである。

また、「聞書控」「聞書清書」には収録されていないが、嘉永二年のものと推定される西四月十七日の「茶湯尋書」では、次の箇条を尋ねている。

一先師之言ニ茶者虚ニして実ニ入之道ト云々、是至極之教与存候、自虚入実、則チ茶之一道ト存候、此入実と申者如何成場をハ指て実トハ可申哉、
(傍線筆者)

これに対し宗猿の答には、「御尋之通りに御座候」と、直弼の問いの核心部分である「実に入る」という具体的事例について何も記されていないかったため、直弼は「此一条答不分明付、本書ニノセス」と加筆し、「聞書控」「聞書清書」には不採用としたのである。

ところで、前述したように直弼は「入門記」において「諸業の助とのみ一片に思ふときは則ち、又喫茶之道立ち難し、虚より実に入るは、茶之一道也、此の茶之一道有ることを知りて、他学の道理ヲ交えず」と記し、諸業の助のための茶の湯を求めれば、「茶之道」が成り立たない、そして「虚より実に入る」ことが「茶之一道」であり、「他学」の道理を交えてはいけなさと主張した。この主張は、当時の直弼の茶の湯観の根幹部分であった。

それでは、何故直弼は一派創立を宣言するのに用いた自らの茶の湯観を、あらためて宗猿に問いただす必要があったのか。これら「入門記」に関する「茶湯尋書」の事例は、いずれも嘉永二年頃のものであるが、直弼が「入門記」を著した段階から数年を経て、直弼の境遇の変化から、その茶の湯観に揺らぎが見え始めていたのであろうか。

「虚より実に入る」との説は「先師之言」と記すように、流祖宗関の言葉と考えられ、「宗関公御自筆写 茶之湯十三箇条」^④に見える「一虚にして実ニ入事」の箇条を踏まえたものであろう。直弼はこの言葉について、「茶湯手前論」と題する片桐宗古の著作から一つの解釈を見出している。宗古の解釈は次のとおりである。

（前略）先茶人へ、業を第一に修行し、それより心の掃除を心掛へし、業ハ日々修行し、心も日々掃除すへし、業と心とハ、両方の手なり、心地の修行のミにて、わざか下手なれハ藝にあらず、茶湯の藝也、藝より心地の修行にいたる、是虚より実に入といふへき歟、（以下略）

この宗古の解釈は、戸田氏がすでに指摘されたように、直弼が自ら茶の湯に関する教訓書を集め書写した茶湯教訓書に「宗古先生茶湯手前論」として収録されていた。この教訓書は直弼が重視した教訓書ばかりで占められていると考えられ、直弼の茶の湯観の根底をなすものと考えられる。また、「茶道下留」に収録される「茶事相伝次第」に記された直弼の流儀による伝書の中にも、「宗古手前ノ論」として挙げられており、直弼がいかにかこの手前論を重視していたかがうかがえる。しかも、「一会集」の到達した茶の湯観は、まさしくこの純真無垢な茶の湯修行を第一として心の修行に至る境地であった。

直弼が、この宗古の説をいつ頃知り得たか明らかでないが、「入門記」執筆時点ではまだ見出せていなかった可能性もある。それは、「閑夜茶話」では、「一片桐宗古之談ニ云」と題して、「心の掃除せされハ、誠の茶人ニあらず、心誠の道ニ叶はねハ、人と交ても終ニハうとまるゝ也、心の掃除ハとふしてするそ」と、茶の湯における「心」

に関する類似の説を書き留めているが、この部分は後に加筆されているからである。また、直弼の稽古次第としては安政四年頃にまとめられたと推定される「茶道下留」に収録された「茶道相伝次第」以前のものには見られないことから、「一会集」の清書段階での直弼の思索との関係も想定される。

以上に見てきたように、直弼が「入門記」を著した時点では、あらゆる流儀を超えて、手の限りを尽くして諸書を渉猟したうえで自身の流儀による茶の湯観を形成し一派創立を宣言したが、尤も重視しなければならぬ流祖宗関の茶の湯観については、まだ確たる裏付けを見出せていなかったこと、また、直弼の茶の湯観において先述した「本家」の説をめぐる疑問が解消出来ていなかったことも想定できるのである。

三 「入門記」以前の井伊直弼の茶の湯観形成

1 井伊直弼と片桐貞信

「茶湯尋書」には、前章で指摘した第九十九箇条以外にも「本家」の説についての質疑が、次の三箇条所確認できる。

〔第七箇条〕

○本家片桐ニテ炭手前羽箒ヲ置ニ置候時一礼致候、此事有之候哉、
答、炭手前羽箒置ニ置候節、一礼者致不申候事ニ候

〔第八箇条〕

○同ク家ニテ点茶仕舞ニ挨拶、蓋置ヲ左手ニ持、中腰ニテ客付ノ方ヘ廻リ右ノ手ニ而（向カ）持入候、此事有之哉、

答、右ノ所作者名物ノ謔遣ヒ候節、右之通り持込申候、平日ハ不仕候、

〔第十二簡条〕

○本家ニ而五ツ羽トテ五枚結ヒノ羽ヲ遣候、古クヨリ有之二哉、

答、石州好之内ニハ見当リ不申候、

(いずれも傍線筆者)

第七・八・十二簡条には「本家片桐ニテ」「同ク家ニテ」「本家ニ而」と記すように、「本家」とは片桐の本家、つまり大和小泉藩一万一千石の藩主である片桐石見守の家をさしていると考えられる。しかも、「茶湯尋書」の第九十九簡条に該当する「聞書清書」では、冒頭部分に「愛宕下ニハ石州之茶事ハ専ら武より出ると申唱候」と書き換えて写されており、「本家」とは江戸愛宕山泉岳寺の石段下、「愛宕下」に屋敷を構えていた大和小泉藩の片桐家と考えて間違いないであろう。

この本家は、当時の江戸で「新石州流」を唱えて一派をなした片桐貞信の家である。ただし、宗猿に直弼が質疑を始めた頃と入れ替わるように、嘉永元年(一八四八)十一月十七日、片桐貞信は他界している。^⑤

ところで、直弼が、彦根藩士真野善次(明美)を通じて片桐貞信との交流があったこと、また、直弼の茶書収集における重要な協力者であったことは、すでに指摘されている。^⑥ 真野が所持していた白釉赤染茶碗の外箱に真野自身が記した弘化二年付の墨書によると、彼は片桐貞信に献茶するため直弼に「御手焼」を願ったところ了解され、直弼は「片桐家御紋付」を完成させ、直書を添えて使者西堀太郎左衛門から江戸の真野に下され、弘化二年(一八四五)八月十四日に江戸で拝

領し、真野は九月十六日、片桐貞信邸へ赴き、常観堂においてこの茶碗で献茶したという。内箱の箱書は、直弼の自筆で「片桐家御紋 赤染茶碗 樹露軒(花押)」と記されていた。また、真野は、直弼の先代井伊直亮や直弼の茶書収集に関与していたことが知られている。^⑦ さらに、弘化三年、直弼が世嗣として江戸出府する際に、直弼と貞信の間で交わされた世嗣祝賀の贈答歌の存在が注目される。^⑧

これらの状況から、直弼が真野を通じて片桐本家の貞信との交流を深め、間接・直接的な贈答をおこなっていたことがうかがえる。また直弼の世嗣決定に際して、譜代雄藩の井伊家三十万石の世嗣となった直弼と、一万一千石の外様小藩の大名との和歌贈答の交流は、通常の家格間の交際では考えられず、直弼と貞信のただならぬ私的關係から生じたものと考えられる。

この直弼と貞信の關係を取り結ぶ真野は、貞信の直門弟である。^⑨ しかも、次の直弼が真野へ宛てた書状により、片桐貞信と真野・直弼の繋がり、さらに確実となる。

一瓢簞形 茶入

右約束之品、漸幸便ニまかせ遣申候、甚荒々敷手際ニて恥入る次第ニ候、扱先便も段々丁寧之事、貴札披見いたし候、此度益茶道出精之よし、片桐家ニも毎々被参候段何寄之義、扱々浦山敷事ニ存候、何卒く情二盃御修行第一存候、此方ニても所々ニて、先師忌会杯も催し候、誠ニ盛ん成事ニ者候得共、何を申しても田舎の事、中く其方などの修行にくらへ候ては、一向手ぬるき事と奉存候、返くも出情いたされ候而、此度は何用も御聞とつけ、^(角力) 早々帰国之上、相談も頼申入度存入候、先は右申進度、早々、以

扱々面倒なから頼申入度一義御座候得とも、是は北川氏ニ申遣候間、とふそく頼入候、さし急ぎ大乱書察読可得候、

霜月廿七日

柳王舎主人(花押)

月窓庵丈

この書状は、直弼が兼ねて真野(月窓庵)から依頼されていた瓢箪形の茶入を送った際に添えられたものである。年紀はないが、直弼が「柳王舎主人」を称していることから、少なくとも天保十三年以降であり、また直弼がまだ彦根の尾末屋敷に居た状況から、直弼が江戸へ出る前年弘化二年の間のもと考えられる。書中に「此度益茶道出精之よし、片桐家ニも毎々被参候段何寄之義、扱々浦山敷事」と記すことから、真野が江戸にあり、本家片桐貞信のもとへしばしば通い稽古をしていること、それを直弼は「浦山敷」と感じていることがわかる。つまり、真野が茶道における師である貞信の身近に居て修行できることを、直弼が羨ましいと感じることは、直弼が少なからず貞信に對する敬慕の念を抱いていることがうかがえる。

また、直弼は「此方ニても所々ニて、先師忌会杯も催し候」と記しており、「先師忌会」を直弼単独ではなく、直弼の茶の湯仲間らと「所々」で催していた実態がうかがわれる。「先師忌会」とは、書状の日付から推測すると、石州流の祖片桐貞昌の忌日である十一月二十日の「宗関忌」をさすと考えられ、直弼は、真野明美と同様に石州流を学んでいたことがうかがえる。これらから、まず少なくとも直弼の学んでいた石州流は、真野らと同じ流儀であること、それは真野が師

事していた片桐貞信の流儀である可能性が高いと言えるであろう。

しかも、書中には「何を申しても田舎の事、中く其方なとの修行にくらへ候ては、一向手ぬるき事と奉存候、返くも出情いたされ候而、此度は何用も御聞とつけ、早々帰国之上、相談も頼申入度存入候」と、直弼の置かれた境遇が「田舎」修行であり、真野の江戸での修行に較べれば「一向手ぬるき事」と卑下しながらも、両者が茶の湯修行という同じ目標に向かい切磋琢磨している状況や、真野が稽古修行に精進し、今回はどんな用件も(師貞信から)確かに聞き、早々に彦根へ帰国されれば、「相談」を頼みたいとしていることがうかがえる。ここでの「相談」とは、真野と直弼が話し合いをするという意味ではなく、真野が茶の湯修行において貞信から相伝を受けた内容を、直弼にも教えることを意味しているのではないだろうか。そうすると、直弼は彦根での庶子屋敷(尾末屋敷)住みという行動の制限された境遇にあったが、藩主の右筆役という役職上、江戸と彦根を行き来する真野を通じて、直弼の茶の湯修行上の疑問を貞信に確認していた可能性も考えられる。

2 片桐貞信門弟としての真野明美

真野明美は弘化二年の「弥生中旬」に片桐貞信(遜齋公)から自作伝書三十二冊の書写を許されており、貞信から皆伝を許されたと考えられる。その伝書の目録は次の通りであり、直弼自身が筆写したものである^⑨。おそらく真野の書き上げた目録を筆写したのと考えられる。

自往年至茲歲明霞園著述之書目

一 論董茶則

正統合

六冊

同炭 風呂ノ手前

四疊半大目長四台子

夫々アリ

一 数木廻枝折

統薄

一冊

底取之事

一 茶道摘要

亂置 風炉亂置

一冊

一 野中清水

草庵手前 同乱炭

一冊

入子飾 重茶碗

一 宇治の山口

長板飾付、凡

七冊

二百八十六図アリ

一 未茶飯録

茶通箱

二冊

一 数寄能八千種

十冊

初号真台子手続

一 茶道説約

唐物立

入子飾 茶碗酒ニ入

茶杓飾 重茶碗

香合飾 重茶碗ノ統薄

四冊

惣計 三十二冊

天保十二歲次辛丑大簇初五日

課業想洪亭文場

同年閏正念八莫脱稿

一 右御書物共、從

遜齋公拝借被仰付候御直第左ニ記^(弟)

田嶋敬美

天保十四癸卯極月下旬写

笹田重美

河野通美

弘化二乙巳弥生中旬写

真野明美

これらの伝書の内、井伊直弼の蔵書の中に確認される写本は、「数寄能八千種 初号真台子手続」と「茶道説約」であり、前者の奥書には「片桐石見守貞信公御自筆 数寄能八千種（中略）嘉永二己酉年二月、片桐石見守貞信公御門葉 真野明美（花押）」と記され、明らかに真弼が再筆写したものを直弼が譲りうけたことがわかる。また、直弼の茶書草稿の中には、「数寄能八千種真台子手続」と記された抜き書きも見られ、直弼が貞信の伝書を披見し、注目していたことも確認される。直弼が、これらの伝書すべてを真弼から借覧したかは不明であるが、直弼が一派創立を宣言する約半年前に、直弼とともに茶の湯修行に励んでいた真野は、片桐貞信の門弟のなかでも確固たる地位を築くまでに修養を積んでいたのである。

弘化二年十一月朔日、真野が貞信の直門弟として、貞信の正統性を示すために著した「石州流茶之湯系図」^③では、真野は茶の湯における系譜上、師「石見守貞信公」を「貞昌公」から直接結びつけ、次のように付記した。

遜齋公御常談曰、

宗関公茶道の心予ハ、連綿として歴世父子承襲して余に至る、其

他茶式器列の如きハ支流餘裔にして論するにたらざる也、

右之通ニ候得ハ御系譜の義ハ御当家御歴世不残御書載セ可然歟ニ候ヘ共、御歴代委ク御点茶を被成候と申ニも無之候間、御茶系のミの義ニ候ヘハ、宗関公より直ニ 遜齋公御相承と御認可然候 (いづれも傍線筆者)

また貞信の茶業について、次のようにも記す。

一宗関公一派の御茶事、今世に区々ニ成居候事を改めなんと多年御工夫有之、御在処小泉表の御文庫に納め置せ給ふ、

関公御在世中の御覚書共数十巻を始とし、其外御直弟筋之御家来共に有之伝来之諸書物共を不残、東都に御取寄しらへさせ給へる事、

関公の御自筆に見して用ひさせ給ふ正掬なきハ、言伝へたりともはふかせられて、慥なる事のミ凡初学より真台子ニ至迄、古格ニ御取あらため、わけをくわえて、

御自筆三十二巻ニ記さるゝ事、天保年中御成就なれハ、こまやかなり、此外武道・文学・歌道・禅学までも万事ニ勝れさせ給ふ事、関公御再来にことならず、 (傍線筆者)

これらによれば貞信は、先師片桐貞昌(宗関)の「茶道の心予」(こころたのしみ―茶道の精神力)は片桐本家に歴代の父子に伝えられ貞信に受け継がれ、その他の茶の作法や器物などは枝葉にして論ずるに足りないと言日頃述べていたといい、片桐本家では歴代が茶の湯に親しんだとは言えないので、「御茶系」に限って言えば、先師貞昌から「直ニ」貞信へ相承されたというべきだと真野は著した。また師貞信が「宗関公一派の御茶事、今世に区々ニ成居候事」を改め、貞昌が在世中の「御覚書共数十巻」を始め、貞昌の直弟筋の家来のもとに伝来

した諸書物を集め、「正掬」がない言い伝えを除き、伝書三十二巻にまとめたことを讃え、その才気を「関公御再来」とまで賞揚した。真野にとって、貞信は真の石州流の継承者であったといえよう。

そして、真野は「御秘伝之御自書写 御免許」された門弟として自身を系図上に位置づけたのである。この系図には、真野のみならず、「彦根藩中 大橋祐寄嘉春、同 大橋了怡」^④として彦根藩の茶道役の名も見えている。幕末期の彦根藩の茶の湯では、真野・大橋らをはじめとする貞信の直門弟、貞信の父貞彰の門弟であった高安彦右衛門(糟粕、御抱え能役者)、片桐宗古の門弟であった三浦左膳(仁斎)の門人である長野足翁・吉用兵輔など、石州流の宗幽・宗古・貞信に繋がる藩士の存在が確認され、直弼の茶の湯も彼らとの交友の中で形成されたと考えられる。直弼の「入門記」執筆以前の茶の湯観形成において、彼らが少なからず影響を及ぼしたことは想像に難くない。

3 直弼と片桐貞信の茶の湯観

片桐貞信の茶の湯は、石州流に表千家流の茶風を加えたものであったとされるが、その茶の湯観は、前述したように嘉永元年頃には、直弼は「本家ニハ石州之茶事ハ専ら武ト唱候」と認識していた。

この時点では、直弼は貞信の「茶事ハ専ら武ト唱候」という茶の湯観に疑念を抱いていたと考えられるが、直弼が「入門記」以前に著したと推定される茶論書「茶道と政道」の中では、武士を意識した茶の湯観が確認される。直弼は、「喫茶の法」は積極的に「政道(政治)」に関わるべきものではないとしながらも、「喫茶の法」が国中に正しく行われておれば、おのずから政治はよくなり、天下は安泰となると

いう点をあらためて確認することにより、「正道の喫茶」がおこなわれていない、当時の世間における「邪道」の茶の湯の現状批判をおこなった。そして、そのような現状の中で直弼は、政治に携わる武士にこそ勧めるのは「正道の喫茶」であり、それこそが、「天下大事」なのであると結論づけた。直弼の前著「樗尾みちふみ」では、「諸業の助」として武士にも有益であると消極的に武士の茶の湯を肯定していたが、「茶道と政道」に至り、積極的にこれを肯定したのであった。

「茶道と政道」の執筆年代は明確ではないが、直弼の茶の湯観形成過程において、武士の茶の湯こそと目指した時期が、「入門記」以前にあったことは確実である。その茶の湯観には、おそらく彦根藩における直弼を取り巻く茶の湯の状況が大きく影響しており、真野をはじめとする片桐貞信の直門弟が関係した可能性は高いといえよう。

それでは、何故直弼は「入門記」執筆に際して、武士の茶の湯＝貞信の茶の湯観に疑念を抱くようになったのであろうか。「茶湯尋書」の第九十九箇条を、もう一度振り返ってみれば、貞信が「本家ニハ石州之茶事ハ専ら武ト申唱候」と考えていたことに對し、直弼は「此事宗関先生之本意ニ者背き可申与存候」と、流祖片桐貞昌の「本意」に背いているのではないかと疑問を呈している。その「宗関先生」の本意について直弼は具体的に記していない。しかし、直弼が「元來茶者茶之一道有りて、茶か武ニテ可有道理者無之事ニ候」と第九十九箇条に記すように、茶には元來「茶之一道」があると主張する点に留意すると、前章でも指摘したように、「入門記」にも引用された先師の「虚より実に入る」との説が有力である。

直弼が「入門記」を著す以前には、彼の置かれた茶の湯を取り巻く

彦根での環境の中で、彦根藩中の片桐貞信門人を通じて、「関公御再来」と門人たちが讃える貞信の茶の湯観に影響を受け、彼らがもたらした流祖宗関に関する伝書の写本などを共有していたと考えられる。しかし、直弼にとって「本家」貞信の示す茶の湯観は、茶の湯の「源流を正す」過程において様々な矛盾も露呈していたのである。直弼は片桐家の「本家」である貞信との関係を重視しながらも、「入門記」を著す頃には、その茶の湯観に限界を抱くに至っていたのであろう。

具体的には、これまで見てきた「茶湯尋書」に見られる「本家」の説への質疑であり、また「茶道下留」に記された、「○片桐宗猿伝壺鋳之書中」の「関守」に関する記事の中で、「此関守の事ハ当流ニテハ用ひ不申候得共、他流ニテハ関守の飾り有之故、時の為ニ飾伝有之候、以上、捨壺之義は不被見」と、関守の飾りを宗猿伝書では採用せず、「捨壺」については「不被見」とした上で、「本家書類、関守・捨壺共不被見」と、本家の伝書にはこの壺飾りに関する作法に関する所見がないことを注記した例や、さらに、「五徳ノ爪置様」に関する次の注記の事例である。

○五徳ノ爪置様、四疊半大目ハ沓ツ爪、客付ニ置、向切・隅炉・風炉ハ沓ツ爪、向ニ置也

△和泉草ニハ、大目構ハ一ツ爪手前ノ右ノ方へ、四疊半・一疊半構ハ一ツ爪向ノ方へ入ル、一ツ爪ノ置様、種々正伝多シ、大形如前ニ印尤也、第一炭ノ置能ニ面々ノ勝手ニ合セヨトモ古人云シ也

△本家片桐ニハ、四疊半ニハ前ヘ一ツ爪、大目ニハ客付ト石州直書ニ有之趣ヲ以、相定タレトモ、此直書疑義共有之 (傍線筆者)

「和泉草」の説と併記するが、傍線部分に見るように、「本家片桐」が「石州直書」にあるとして採用する説については、「此直書疑

窓 敷義共有之」と、「本家」が主張する伝書の信憑性に懐疑の念を抱いていたのである。直弼の宗猿への接近は、こうした「本家」の説に対する疑問を正すことからはじまったのであろう。

おわりにかえて

—井伊直弼の師系と片桐宗猿—

直弼が最終的に宗猿を師と位置づけていたことは周知のことである。しかし、これまで見てきたように直弼が茶の湯観を形成していく過程の中で、片桐貞信をはじめその門人、あるいは片桐宗古の系譜を引く彦根藩家中の存在は、直弼が宗猿と接近する以前では重要な位置を占めていたことも事実である。

それでは、直弼は一派創立を宣言する根拠をどこに置いていたのか。換言すれば、直弼が「入門記」執筆の前提とする流儀相伝を誰からうけていたのか。最後に、この問題を直弼が晩年に精力的に編纂した茶人系譜に対する思索とからめて検討し、おわりにかえたい。

直弼は天保六年（一八三五）十二月に茶の湯だけでなく新心流の居合においても一派を立て、「神心流」と名付けた。その際、居合の師加西精八郎に対しては、「如極意抄」により一派創立したことを師である加西精八郎の名を記して明らかにし、また師に対し秘伝書「神心流居相表之巻」^⑤を示していた。これらの経緯から、直弼は流儀相伝における一派設立の手續きの上で、師系を示し、師に承認を受けることを理解していたと考えられる。では、茶の湯において一派創立を宣言した際、直弼は誰を師系としたのであろうか。「入門記」には、直弼の直接の師には全く触れず、「即、吾が流も又、石州之清流を汲む

也」と流祖石州（宗関）の名を記すのみである。当時の石州流は完全相伝制を採っていたことが知られ、皆伝を受けたものは新たに流派を成すことも許されていた。

しかし、幕末期に「新石州流」を起こした片桐貞信は、誰から皆伝をうけたのか明らかでないにもかかわらず、彦根藩においては藩士真野明美のみならず、茶道役の大橋家もその門弟に名を連ねており、貞信の茶の湯は幕末期の彦根藩の流儀として定着していた。貞信の流儀は、茶の相承は単に式法（作法）や道具の相伝ではなく、「茶道の心予」にある、と考えていたことは前述したとおりである。貞信はその点において、自らの茶湯の精神としての系譜は「連綿として歴世父子承襲して余に至る」と自負していた。また門弟においても「御茶系のミの義ニ候へハ、宗関公より直ニ遜齋公御相承」との認識に立っていたのである。貞信らの主張は、当時の石州流の茶の湯は、流派により区々となっていたことを改め、「慥なる事のミ凡初学より真台子ニ至迄、古格ニ御取あらため」ることにあつた。そして、貞信の茶の湯に対する姿勢は、直弼が「入門記」で記した「源流を正して、吾が一派を作すに及べり」との言にも共通する部分があつた。

直弼にとって、貞信の志す茶の湯は、彦根の尾末屋敷時代の直弼が置かれた環境の中では、共感を覚えるものであつたと考えられる。この時期、貞信の高弟となっていた彦根藩士真野明美の存在は、貞信と直弼を結びつける重要な意味を持っていたのであろう。貞信が渉猟した「関公御在世中の御覚書共数十巻を始とし、其外御直弟筋之御家来共に有之伝来之諸書物共」は、「源流」を正そうとする直弼の茶の湯観形成において願ってもない材料であつた。直弼も貞信と同じ道を後

追っていたのである

ただし、直弼の茶の湯研究が深まるにつれ、貞信が主張する「古格」による茶の湯観と、直弼の見出そうとした「源流」とは、その解釈において微妙な差違が生じてきた。その差違の根幹は、「武」(「実」を前提にした茶の湯か、「茶」(「虚」を前提とするか)にあった。その差違こそが直弼に一派創立を発起させる基となったのであろう。

直弼は、弘化二年十月に「入門記」を著すに至り、後者を主張した。その前段階で直弼は、弘化二年三月には「茶は茶に非ず、茶に非ざるに非ず、只茶のみ、是茶と名づく」との「三言四句茶則」を著し、参禅の師である仙英禅師に対し、「世俗の茶も超俗の茶もないところにある茶こそ、不二一如の茶。あるがままの茶の道」であると、ただひたすらに「茶之一道」を求める茶の湯観を示した。この茶の湯観は「虚より実に入る」という、流祖宗関の茶の湯観を踏まえたものと考えられる。仙英禅師も「いとよくて」と感心し、直弼の「こころはへ」に対して「御歌」を返し、さらに直弼は「三言四句茶則」に関する「着歌」として和歌四首を詠んだのである^⑤。

直弼の茶の湯においては、これが「悟道」の瞬間であった。ただひたすらに「茶之一道」を求めた当時の直弼にとって、流祖宗関の「源流」が問題であり、様々な流派を生じさせた石州流の現状の中で、師系は大きな関心事ではなかったのかもしれない。その意識は、宗関からの直伝は受けていないが、「御茶系」は流祖宗関から直に貞信へ「御相承」とする貞信の門流意識とも共通するといえよう。

しかし、直弼の江戸出府は、そのような意識に大きな変化をもたら

した。井伊直弼と片桐宗猿との出会いの契機は明らかでないが、少なくとも直弼が江戸へ出て以降のことと考えられている。そして「茶湯尋書」が開始される嘉永元年の冬頃は、奇しくも十一月七日に貞信が没する時期に相前後していた。この時期は、直弼が貞信から距離を置き、宗猿へ接近する好機であったのかもしれない。

直弼と宗猿を引き合わせた人物は、今のところ定かではないが、当時の幕府関係者の中には、幕府茶道役をはじめ、茶人としての片桐宗猿の存在を知るものも少なくなかった^⑥。直弼の茶会に招かれた大名も、親密な交友関係を持つ溜詰席の同席大名ばかりでなく、津山藩の松平斉民(茶号宗予)など、茶の湯に通じた大名が見られ、江戸へ出てからのこうした交友関係により、宗猿の存在を直弼が知ったと考えられる。

直弼は宗猿との交友を続ける中で、石州流のみならず、各流派の茶人におよぶ「茶人系譜」を編纂している。この系譜は、天保三年に版行された『古今茶人系譜』^⑦をもとに、新たに各流派の系図・系譜を取り寄せ、直弼自身が自説として編集したもので、真能阿弥から千利休までを記した「古流 自珠光、紹鷗門マテ」、千利休門人を記した「前ノ千家 織田・細川・藪内・圓乗坊・南坊・下久田・上古田」、千少庵以降の千家諸流を記した「後ノ千家 表流・裏流・武者小路・杉木・藤村・山田・川上」、「石州流・遠州流」の四冊からなる。直弼がこれほどまでに系譜に執着したのは何故であろう。

あくまで推測であるが、直弼が「源流」を正す作業の中で思い知らされたのは、伝書などの書物に記されたものには限界があったことである。茶の湯における重要な部分の多くは、「口伝」として師弟間で

窓 相承されていることに気づかされたのではないだろうか。直弼の「茶湯尋書」による交信は、その書物による限界を克服する一つの手段であつたと考える。宗猿との交信の中でも、直弼が「残火跡見ノ二会差別、当流ニも有之哉」と尋ねたのに対し、宗猿は「少々違ひ候廉も有之候、口伝」と答え、具体的には何も記さなかったが、直弼は「茶湯をり／＼草」においては、これを次のように明確に区別している。

一 残火の事、是ハ跡見ニ似て別段之事なり、前件の跡見ハ一会の趣向を見る為なれば、即日又は一兩日の内にも約束次第催す事、此残火ハ一会の残りの火といふ事ニて、ついてなから一服を所望する侘会也、ゆゑニ必ず一会すみ即日催す事ニかきるなり

直弼が宗猿から「口伝」をうけた確証はないが、こうした「口伝」の重要性を直弼は十分認識していたと考えられる。「一会集」をはじめとする多数の伝書を著し、自身の流儀作法を明確にしようとした直弼においても、「口伝」とし作法を明示しない部分が、多く確認される。すなわち、当時の石州流での各流儀における式法解釈の差違は見られるが、師弟間のみでしか相承され得ない「口伝」は、師系を明確に出来ない茶人が知り得ない聖域であつたこと、師系の重要性を理解したのである。その点で宗猿の師系は、直弼が「源流」を正す上で、流祖宗関からの相承系譜としては最も正統なものと認識されたのである。

直弼が「聞書清書」の冒頭に掲げた片桐家の本家・分家の三家に関する系図では、次のように著している。

○片桐三家之系図

○片桐肥後守直貞

片桐主膳正貞隆

貞隆惣領 幼名雀千代

片桐石見守貞昌

貞隆二男

片桐勝七郎貞晴

寛永四卯年奉願三千石分知相成候、
茶法桑山左近大夫より授る、皆伝無之

二代目より六代目迄茶不楽

七代目

片桐帶刀宗幽

茶ハ千家を学、其後伊左幸琢之門ニ入、茶を学

片桐新之丞宗古

茶法を父ニ学

1*

貞昌惣領 幼名雀千代

下條長兵衛信隆

茶法を石見守貞昌より皆伝、茶名無之候

下條半兵衛信近

茶法父ニ学、皆伝、保壽庵ト申候

片桐長兵衛信興

茶法父ニ学、皆伝、泰勝庵ト申候

片桐長兵衛信馮

茶法父ニ学皆伝、隆々庵宗□ト申候

片桐長兵衛信任 茶法父ニ学、皆伝、義雲庵宗鶴ト申候	片桐 鞆負信方 茶法祖父ニ学、皆伝、四国庵宗猿ト申候	貞昌二男 片桐長十郎貞明 多病ニ付剃髪、後ニ栗原丹齋と名乗、茶法を父ニ学、皆伝	貞昌三男 初名友之助 片桐主膳正貞房	2* 幼名松田雀松 片桐石見守貞起 茶不楽 三十三才ニ而死	幼名勝之助 片桐主膳正貞音 茶不楽 二十三才ニ而死	幼名孫之丞 片桐石見守貞芳	幼名孫千賀 片桐主膳正貞彰	幼名輔五郎 片桐石見守貞信 茶相楽候	幼名精一郎 片桐主膳正貞中	片桐助作貞照
------------------------------	-------------------------------	---	--------------------------	--	---------------------------------	------------------	------------------	--------------------------	------------------	--------

(欄外) 1* 一書ニ下條長兵衛妾腹惣領ニ付、分知千石相願、且又丑年故
 片桐之別苗下條と相名乗、二代目より片桐ニ改メ申候
 2* 一書ニ貞昌四男松田権之丞貞尚末男ニ付、松田ト相名乗申候

この系図は、直弼自身が片桐宗猿や荒川善蔵などから取り寄せた系図等をもとに作成したと考えられるものである。宗猿(片桐鞆負信方)の家の歴代の注記には、「茶法父ニ学、皆伝」「茶法祖父ニ学、皆伝」など歴代が茶法を相承してきたことを明記し、宗古の系統については「二代目より六代目迄茶不楽」と記した上で、宗幽・宗古については、千家に学び、後に石州流の伊佐幸琢に学んだという師系を示した。しかし、片桐本家にあたる貞信の系統では、貞起・貞音には「茶不楽」と記し、貞信についても「茶相楽候」とのみ記し、相承の師系すら明記していない。直弼は貞信の茶の湯を全否定したわけではないが、師系の正統性という点において不確かなものを抱いていたのである。前述した「茶人系譜」の編纂には、こうした直弼の師系重視の意識を背景に、自身の茶の湯の正統性を示そうとする意図がよみとれるであろう。石州流の各流派のみならず、十六世紀以来、先人により繰り返された茶の湯の思索の中から学び続けた直弼は、最終的には片桐宗猿を師と位置づけるに至った。「宗猿先生茶道聞書」と直弼自身が題名を付した「聞書清書」は、彼の師系を証明するものであったのである。

註

- ① 中村勝麻呂・高橋箒庵編『井伊大老茶道談』(籌文社、一九一四年)
- ② 藤直幹「井伊直弼の茶道」(『武家時代の社会と精神』創元社、一九七七年)、村井康彦『茶の文化史』(岩波書店、一九七九年)。

- ③ 熊倉功夫『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会、一九八〇年）
- ④ 谷端昭夫①「幕末の武家茶道 井伊家の茶の湯と直弼」『近世茶道史』（一九八八年、淡交社）
- ⑤ 井伊裕子①「井伊宗観の茶道」（『研究と資料 茶湯』二三号、一九九四年）
- ⑥ 谷村玲子『井伊直弼 修養としての茶の湯』（創文社、二〇〇一年）。この方向性は政治においても他者を寄せ付けない、自己中心的な専制的方向へ向かわせたと結論づけたが、藩主時代の政治思想や大老としての直弼の政治行動分析を踏まえていない議論である。これらを分析すれば、直弼の独断的傾向は藩主時代や大老主任後、少なくとも安政五年八月頃まで見られないことは明白である。拙稿「井伊直弼の政治行動と意志形成過程」（佐々木克編『幕末維新の彦根藩 彦根城博物館叢書1、二〇〇一年）を参照されたい。
- ⑦ 頼あき①「井伊家伝来の茶書と直弼の茶書収集」（『彦根城博物館研究紀要』一〇号、一九九九年）、同②「井伊直弼の茶の湯―著述活動からのアプローチ―」（熊倉功夫編『茶の湯の文化』淡交社、二〇〇三年）、戸田勝久「茶の湯という不可思議な領域―井伊直弼（宗観）を繞って―」（『茶道学体系』第三巻、淡交社、一九九九年）、井伊裕子②「井伊家伝来の茶書」（『茶道学体系』第一〇巻、淡交社、二〇〇一年）、谷口徹「井伊直弼ゆかりの茶道具（上）」（『彦根城博物館研究紀要』二二号、二〇〇一年）、熊倉功夫編『史料井伊直弼の茶の湯（上）』（彦根城博物館叢書2、サンライズ出版、二〇〇二年）など。
- ⑧ 茶の湯観の変遷については、別稿「井伊直弼の茶の湯観―「茶湯一会集」の成立過程―」（熊倉功夫編『仮称 井伊直弼の茶の湯』二〇〇五年刊行予定）を留意している。
- ⑨ 頼あき①「井伊家伝来の茶書と直弼の茶書収集」（前掲註⑦）
- ⑩ 頼あき②「井伊直弼の茶の湯―著述活動からのアプローチ―」（前掲註⑦）
- ⑪ 彦根城博物館の彦根藩資料調査研究委員会「彦根藩の茶湯」研究班が開催した講演会（二〇〇〇年二月六日、彦根城博物館）における母利報告「『一会集』の成立過程」。本稿の一部は、この報告をもとにしている。
- ⑫ 井伊①論文、谷村論文、頼②論文などがこの立場を採り、筆者も基本的に政治行動との関連でとらえている。その具体的検討は前掲の別稿論文（前掲註⑧）に記した。
- ⑬ 頼あき②「井伊直弼の茶の湯―著述活動からのアプローチ―」（前掲註⑦）
- ⑭ 谷端昭夫②「解題」井伊直弼の茶会記」（『茶の湯文化』三号、一九九六年）。この時期に始まる「毎会」「順会」による家臣を亭主とする稽古茶会の歴史的意義については、前掲註⑧の別稿「井伊直弼の茶の湯観―「茶湯一会集」の成立過程―」を参照。
- ⑮ 谷端昭夫②「解題」井伊直弼の茶会記」（前掲註⑭）
- ⑯ 頼あき②「井伊直弼の茶の湯―著述活動からのアプローチ―」（前掲註⑦）
- ⑰ 『彦根市史』中冊（彦根市、一九六二年）
- ⑱ 頼あき①「井伊家伝来の茶書と直弼の茶書収集」（前掲註⑦）。なお、戸田勝久氏は「茶の湯という不可思議な領域―井伊直弼（宗観）を繞って―」（前掲註⑦）の中で、直弼が貞信を評価せず宗猿との関係を重視したことを前提に、「入門記」で「源流を正す」とした直弼が宗猿を憑んだ根拠を指摘したが、その立論の前提には根本的な史料の誤読がある。直弼は「宗猿先生茶道聞書」の中で片桐貞信を「茶不楽候」と明記したことについて、「強弁」とし、「直弼には「宗猿先生」しか視野に存在しなかったのであろうか」とする説は、「茶相楽候」の部分を誤読したための誤解である。直弼と貞信の関係については第二章で詳述する。
- ⑲ 『大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料』一・五（東京大学史料編纂所編）
- ⑳ 『彦根藩文書調査報告書（一）』（彦根市教育委員会、一九八三年）
- ㉑ 井伊裕子①「井伊宗観の茶道」（前掲註⑤）
- ㉒ 拙稿「井伊直弼の茶の湯研究と片桐宗猿」（彦根城博物館展示図録『大名茶 その世界』一九八八年）では、「茶道聞書 下之巻」の存在を見落としていた。
- ㉓ 「茶湯尋書」の年代推定の再検討は、すでに彦根城博物館の彦根藩資料調査研究委員会「彦根藩の茶湯」研究班が開催した講演会（二〇〇〇年二

月六日、彦根城博物館）における母利報告「『一会集』の成立過程」で分析表を示した上で口頭発表を行っており、頼②論文も、そのことを踏まえて、推定年次を年表にして示したが、推定の根拠までは紹介していない。あらためてここで分析方法を紹介して詳細に検討を行い、一部年代推定に訂正をほどこした。

- ②④ 直弼は在国中に領内視察のための巡見を繰り返しており、安政四年には、三月二十三日から同二十六日に領内の北筋（坂田郡の天野川以北湖の地域）、五月十一日から同十五日までは中筋（天野川以南、愛知郡の宇曾川以北の地域）に赴いている。

- ②⑤ 頼あき②「井伊直弼の茶の湯―著述活動からのアプローチ―」（前掲註⑦）

- ②⑥ 拙稿「井伊直弼の政治行動と意志形成過程」（前掲註⑥）

- ②⑦ 彦根城博物館の彦根藩資料調査研究委員会「彦根藩の茶湯」研究班が開催した講演会（一九九八年二月六日、於彦根城博物館）における谷端昭夫報告「井伊直弼の茶会と茶道具」。

- ②⑧ 拙稿「井伊直弼の政治行動と意志形成過程」（前掲註⑥）

- ②⑨ 「東都水屋帳」（河原正彦編「井伊家伝来の茶道具」平凡社、一九八五年）

- ③① 戸田勝久「茶の湯という不可思議な領域」（前掲註⑦）

- ③① 谷村玲子「井伊直弼 修養としての茶の湯」（前掲註⑥）

- ③② 戸田勝久「茶の湯という不可思議な領域」（前掲註⑦）

- ③③ 片桐宗猿の妻鉄の伝承については「井伊大老茶道談」に、耀鏡院の侍女竹内増尾の筆記として収録される。

- ③④ 熊倉功夫編『史料 井伊直弼の茶の湯（上）』所収（前掲註⑦）

- ③⑤ 以下、直弼が関与した茶会記録については、谷端昭夫③「資料 井伊直弼茶会記」（『茶の湯文化』三号、一九九六年）、および、谷端昭夫報告「井伊直弼の茶会と茶道具」（前掲註⑦）に依拠している。

- ③⑥ 「十月六日夕桜田於新席懐石付」（『井伊家伝来典籍』S—三四五）

- ③⑦ 「東都水屋帳」（前掲註②⑨）

- ③⑧ 「懐石付」（『彦根藩井伊家文書』四〇五四〇）

- ③⑨ 「東都水屋帳」（前掲註②⑨）

- ④① 「茶の湯という不可思議な領域」（前掲註⑦）。谷村玲子氏は「井伊直弼修養としての茶の湯」（前掲註⑥）において、「管見の限りでは鐵と宗牛が同一人物である記録はなく、また直弼の流儀の茶名所持者に「宗牛」は発見できない。しかし正室、前藩主正室の会である以上、「宗牛」なる人物は片桐宗猿の関係者、もしくは井伊家と関係の深い人物であったと思われる。」とする。

- ④① 中本勝麻呂編「井伊大老茶道談」（前掲註①）。

（前略）嘉永五年のある月より、茶の湯の式を習はせ給ふ事とはなりにき、幕臣片桐朝負（宗猿）とて茶の式を能くす人の妻に、鉄（かね）と申す婦人あり、是も夫の流を習ひ能くせり、之を呼び寄せ、師として女中をも御相手として、御稽古あらせらる（中略）粗ば鉄より御伝授を受けさせられ女中中等も覚えたる頃に、公の御一派の御流儀出来中がり、之よりは専ら御流儀により行はせ給ふ事となり、公より御茶書を御返しにあれば、之に従ひ増尾等筆写して、御手許にさし上げ、己等も之によりて習へり、（以下略）

- ④② 野村瑞典編『定本石州流』第六卷（光村推古書院、一九八〇年）、「宗猿派（系）」の項。

- ④③ 井伊裕子①「井伊宗観の茶道」（前掲註⑤）、頼あき②「井伊直弼の茶の湯―著述活動からのアプローチ―」（前掲註⑦）。

- ④④ 「彦根藩井伊家文書」（二八一—九八）

- ④⑤ 「彦根藩井伊家文書」（二八〇—七五）

- ④⑥ 頼あき②「井伊直弼の茶の湯―著述活動からのアプローチ―」（前掲註⑦）。

- ④⑦ 「茶道下留」に収録された、直弼の流儀による稽古次第を示した「茶道相伝次第」には、「一服之伝」の箇条があり、直弼はこの伝書執筆を想定して宗猿に質疑したと推測される。

- ④⑧ 「井伊家伝来典籍」S—二五。本書は天保十二年に真野明美が「以関公之御真蹟拝模」したもので、のちに直弼が編集した「信心銘等茶書拔書」（註④⑨参照）に採用される。十三箇条の内、最後の箇条に次のように記されており、直弼はこの解釈を宗猿に確認しようとしたのである。

一虚にして実ニ入事

此の一章工夫専一なるへし、万事わするゝ時へ虚なり、虚なるのミ
かよきにもあらず、其又実ニ入るの場なからんは有へからず、うハ
へハ虚相に見せて、実ニハ念を入て万事を仕立る事、敬の沓つに
て、すぎやの専要なるへし、浮虚なるは尊からず

- ④⑨ 井伊家伝来の茶書の中には「信心銘等茶書拔書」(『彦根藩井伊家文書』二八〇七四)・「信心銘等茶書拔書」(『井伊家伝来典籍』S一〇八)の二本があり、それぞれ配列の異同が見られ、前者は直弼自身の筆跡で編集されたもので、直弼自身の著作である「三言四句の茶則并道歌」も収録される。

- ⑤⑩ 典拠は「宗古先生より三浦左膳へ送ル一通」(「信心銘等茶書拔書」前掲註④⑨参照)である。

- ⑤⑪ 「石州流茶之湯系図」(野村瑞典編『定本石州流』第六卷、前掲註④⑨)

- ⑤⑫ 北村寿四郎『湖東焼の研究』(湖東焼の研究出版後援会、一九二五年)、頼あき①「井伊家伝来の茶書と直弼の茶書収集」(前掲註⑦)、母利別稿

- 「井伊直弼の茶の湯観―「茶湯一会集」の成立過程―」(前掲註⑧)

- ⑤⑬ 頼あき①「井伊家伝来の茶書と直弼の茶書収集」(前掲註⑦)

- ⑤⑭ 井伊直弼「柳之四附」(『彦根藩井伊家文書』二八一六二〜三)に「遜斎老(片桐貞信)よりことほぎの歌送られけるかへし」と題する次の和歌が収録される。

数ならぬ 鳩の浦人 春を得て 花のことは みるそうれしき

この和歌は、井伊直弼と片桐貞信が交わした年頭祝賀の返歌と理解され、直弼と貞信が、貞信の弟子であり彦根藩士でもあった真野を通じて交友関係を築いていたことを裏付けるものである。しかも、この和歌の深意は、「数ならぬ鳩の浦人」を直弼と想定すれば、「春」を得たとは、直弼が晴れて世嗣として弘化三年(一八四六)正月に江戸出府を命じられたことを指すと考えられる。

- ⑤⑮ 戸田勝久「茶の湯という不可思議な領域」(前掲註⑦)、頼あき②「井伊直弼の茶の湯―著述活動からのアプローチ―」(前掲註⑦)。

- ⑤⑯ 北村寿四郎「湖東焼」(『陶器講座』第四卷、雄山閣、一九三五年)の第十図附属書状。

- ⑤⑰ 「明霞園著述之書目」(『彦根藩井伊家文書』三〇六四三)

- ⑤⑱ 「茶書草稿」(『彦根藩井伊家文書』三〇六二一)

- ⑤⑲ 野村瑞典編『定本石州流』第六卷(前掲註④⑨)所収。

- ⑥⑩ 「真台子伝授書」(野村瑞典編『定本石州流』第六卷、前掲註④⑨)によれば、大橋祐寄は、嘉永六年五月十八日に、貞信の家来笹田弥一右衛門から最終段階である「真台子」の伝授を受けたことが確認される。

- ⑥⑪ 戸田勝久「茶の湯という不可思議な領域」(前掲註⑦)

- ⑥⑫ 「如極意抄」(『彦根藩井伊家文書』三〇七二二)

- ⑥⑬ 「神心流居相表之巻」(『彦根藩井伊家文書』二八二七八・二八一七九)

- ⑥⑭ 熊倉功夫「井伊直弼の茶書と茶の湯」(熊倉功夫編『史料 井伊直弼の茶の湯(上)』所収、前掲註⑦)

- ⑥⑮ 「三言四句茶則并道歌」(前掲註④⑨)

- ⑥⑯ 戸田氏の指摘によれば、西尾市立図書館所蔵の岩瀬文庫のなかに、「片桐宗猷蔵器物集一冊」があるとされている。

- ⑥⑰ 「井伊家伝来典籍」S一五四。井伊家に伝来するものには、直弼自身による朱筆の書き込みが多数確認される。

- ⑥⑱ 「井伊家伝来茶書目録(上)」の内、「3系図・系譜関係史料」(熊倉功夫編『史料 井伊直弼の茶の湯(上)』所収)を参照。

- ⑥⑲ 『彦根藩井伊家文書』三〇七七九〜三〇七八二

- ⑦⑩ 管見の限り確認できるのは、以下の部分である。いずれも、熊倉功夫編『史料 井伊直弼の茶の湯(上)』所収のもの。

「一会集」

「中立」

一 鐘喚鐘打様之事、せはしく打ハ悪く、如何ニも静にして間のぬけたるハ猶あし、心しとやかにひゞきの不絶やうニ打事、口伝有り

「後炭中」

一 亭主後炭手前の内、釜をあげ炉辺三羽ニて掃きたるとき、正客御流れ拜見可致と相客を誘ひ、いづれも炉辺へより流れを拜見し、能御流れニ候と感すれハ、亭主も此時火箸をとめて共々感して、客よりの挨拶ニ可応、此観念口伝あり、風炉会ニハ此拜見無之、観念の子細もなし

【をりく草】

「不時会」

一態と仕付たる飾りを嫌ふ、只常のまゝなる所へ請すへし

一説ニいかにも秘蔵の道具など一色二色出シ、真ニすへし、心ハ草かよし云々、此説謂無ニハあらねど、不時の本意ニハかなひかたし、依而先は用ひす、猶委敷ハ口伝ニ有

「雨中会」

一手水鉢、蓋すへし、露地一体へ水打ニ及はす、門下・軒下・雪隠など乾きたる所へ、徒然ニ露をもたす事、口伝

「首途之茶湯 餞別会とも」

一送り鑪を打事、先つは不致事なれど、深露地またハ外露地の模様ニより、見送りすみて水屋ニ入り、静かニ鑪を打事、誠ニ功者の上なる所作なり、打数は定りなく大小の差別もいたさず、平等ニ打つへし、猶口伝

「柴火会 ふすへ茶」

一是ハ野懸の茶事也、山野にて土をほり、松などのえたに釜を釣りて茶を点すること、定りたる事ハなしと云とも、根元の格は一ツニそなはらずしてハ成しかたし、口伝

【初十簡条】

「〇底取炭所望」の「底取手続」

一初炭之節底を取ニハ、都而初炭の手つゝきにて、半田持出し、底取候分は前条のごとし、極寒の働き座中へ半田を出すときハ、正客膳を持出し、退く時も引なり、此事猶口伝を受ヘシ

【炭之書】

炭を継方之事

一ニ火移り 炭おかはたとひ習ひにそむくとも
湯のよくたぎる炭ハすみなり

炭おくにならひはかりにかゝわりて
湯のたぎらざる炭ハけし炭

二ニ去嫌ひ 炭おかは五徳はさむな十文字

丁山形人をいむなり

三ニ炬ニ向ひ 決断して炭を入

四ニ火箸障り 炭おくに習ひのことく嗜みて
火はしさはりもこゝろ尽せよ

五ニ初置たる炭置替す、 六ニ炭灰ニ埋ます
七ニ中より落たる炭、其儘趣向 右七ヶ条口伝

*この他、「身之曲尺」に二箇所、「浜之真砂」に一箇所あり。

⑦ 片桐宗猿筆の「石州流片桐家系図」(『彦根藩井伊家文書』三〇六四九)や、嘉永六年のものと推定される荒川善蔵から到来した「石州茶道相伝之系図」(『井伊家伝来典籍』S—四七四)など。

(付記)

本稿の一部は、平成七年に発足した彦根城博物館における彦根藩資料調査研究委員会「彦根藩の茶湯」研究班の講演会(二〇〇〇年二月六日、彦根城博物館)における著者の報告「『一会集』の成立過程」内容の一部に、近年の研究知見を加えてまとめたものである。講演会での報告内容とは見解を改めた部分も多くあるが、研究の進展としてご寛恕願いたい。なお、本稿執筆にあたり、研究班長熊倉功夫氏をはじめ研究員各位には貴重な助言をいただいた。また、彦根城博物館には資料閲覧の便宜を図っていただいた。末筆ながら深甚の謝意を表したい。

表I 茶湯尋書一覧

表I-① 「聞書控」上之巻

*「条文頭書」欄中の「○」の付号は「聞書控」の冒頭に付されたもので、「◎」は「○」に合点のあるものを示す。

番号	清書	条 文 頭 書	引 用 箇 所	「茶湯尋書」との対応関係
01	10	◎極暑之節風炉ノ中ヲシテ炭ヲ置キ釜ヲ懸ケサル事致候哉	未詳	現存せず（嘉永元年頃）
02	11	◎道具無シノ数寄ト云テ懸物ヲカケ、長板ニューツ……	未詳	
03	65	◎茶箱ノ手前ニ客湯ヲ乞テロ中ヲ改候程ニ……	未詳	
04	12	◎風炉ノ釜ノ蓋ヲ堅ニ取り候事、逆勝手ニ而、……	未詳	
05	66	◎続薄ト申事、当流ニ有之候哉	「初十箇条」に「附薄」あり	
06	67	◎囲炉裏・五徳居様、是迄者四疊半大目ニ者……	「灰の書」の「囲炉裏灰形」にあり	
07	—	○本家片桐ニテ炭手前羽箒ヲ置ニ置候時……		
08	—	○同ク家ニテ点茶仕舞ニ柄杓蓋置ヲ左手ニ持、中腰ニテ……		
09	63	◎平点規範、刀自袂・溪鼠余談・逆流玄談・和泉草、右等之書類……	「逆流玄談」は「をり草」の「正客差支……」で採用、「刀自袂」は「をり草」で1回、「和泉草」は「一会集」で2回、「をり草」で5回採用あり	
10	64	◎口切之懐石ニ相定り候仕方トテ有之候哉	「一会集」では採用するも「必ずとすへからず」とあり	
11	96	◎左右ノ三羽相用候哉	未詳	
12	—	◎本家ニ而五ツ羽トテ五枚結ヒノ羽ヲ遣候、……		
13	154	○石州好ニ扇ノ行燈ト申モノ有之候哉	未詳	
14	68	◎同好糸目五徳ト申モノ有之候哉	未詳	
15	69	◎同好真塗ノ炉縁ニ菊ノ蒔絵致候モノ有之候哉	未詳	
16	16	◎茶席ノ懸物、掛ケ外シニ竿ヲ用候哉、又……	「一会集」に採用	
17	136	◎面桶ノ洒トチ目向ケ方之説、区々ニ聞ヘ申候、何方ヘ向候……	未詳	
18	58	◎待合ノ鳴物を釣候ニ者、何紐ニて釣候か本式ニ候哉	未詳	井伊22632：年月日未詳（嘉永元年頃） * №18～22まで5ヶ条全部を収録。 * 尋書では、18は22の後に入る。
19	109	◎搦茶カヘシノ事、諸説有之候、当流何ノ説ヲ用候哉	未詳	
20	106	◎雪吹ノ説如何	「初十箇条」に「雪吹包」あり	
21	107	◎雪吹濃茶ニ用候哉	「初十箇条」に「雪吹包」あり	
22	108	◎中次者薄茶器と心得候、但し敷紙ノ節ハ如何哉	「茶道下留」の「当流茶事稽古次第」に「中次敷紙之伝」あり	
23	15	◎茶席ニ画斗之懸物者掛ケ不申事ニ哉、……	未詳	井伊22631：年未詳12月15日付（嘉永元年頃） * №23～32まで10ヶ条全部を収録。
24	17	◎釣香炉ハ何方ニ釣たるか宜候哉	「一会集」の「腰懸」に採用	
25	25	◎二重切ニ一方入候時ハ上カ下敷	未詳	
26	73	◎釣釜者春致候か本鉢といふ事、如何	未詳	
27	74	◎台目柱有之席ニハ、釣釜ハ不致候哉	未詳	
28	75	◎手取釜ノ口、何方ヘ向候哉	未詳	

29	13	◎冬風呂を置候ニ……	「をり草」の「風炉之名残会」に採用 未詳	
30	14	◎逆勝手之台子長板……		
31	—	○逆勝手ニ台目席ハ無之ト……		
32	62	◎廻り炭・廻り花といふ事、当流にも……	「廻り炭・廻り花・花月三式書」あり、 また「炭の書」では「当流ニハ旧来その 沙汰なけれど」としながら採用する	
33	59	◎石州ニ者、炭之寸法定められすといふ事如何	「炭の書」にあり	井伊22627：年未詳正月19日付(嘉 永2年) * №33～50まで20ヶ条の内、18ヶ 条を収録。 * №48と49の間に次の2ヶ条あり。 ①「客者亭主之指置候手燭・灯籠 之類を上客持候て露地へ入候哉 ……」 ②「中立之節者、亭主軒下へ燭を 延してよりしく哉」
34	60	◎初炭ニハ胴炭前ニ置、後炭ニ者胴炭向ニ置といふ事……	「炭の書」にあり	
35	61	◎初炭・後炭済て薄茶点仕廻、今一度……	「一会集」にあり採用	
36	145	◎唐銅七宝杯之香合者、冬か夏か	未詳	
37	146	◎塗物木地物香合ニ薰物を入炉之節用候ても……	「茶道下留」ではこの説採用せず	
38	18	◎数寄屋ニ空炷致候事有之哉	未詳	
39	19	◎香之茶・茶之香といふ事、……	「をり草」の「夜込」香を焚くこと	
40	26	◎釣舟花入数寄屋ニ釣り候向方如何	未詳	
41	27	◎釣瓶之花入、図物ニも見当り不申候、……	未詳	
42	28	◎夜花を不入、又白キ花者入候なと申候、……	「をり草」では「花は白色に限る」	
43	29	◎雪中花入を出シ、花を不入、又赤キ花入候……	「をり草」では「赤き花も当流ニ而は用 いず」	
44	132	◎三百ヶ条ニ柄ノ有火箸三膳有、注ニ一膳ハ……	未詳	井伊22598：酉2月17日付(嘉永2 年) * №51～70まで20ヶ条全部を収録。
45	38	◎敷松葉揚様如何	「一会集」に採用	
46	41	◎露地ハ下駄を用候事、本体と存候……	「一会集」では草履を用いず	
47	45	◎雨中迎ニ出候ニ、亭主も露地笠用候哉、……	「一会集」では「雪中」のことあり	
48	46	◎夜中迎ニ出候ニ、手燭を用、風雨之節ハ……	「をり草」の「夜会」にあり	
49	48	◎寒天之節、つくはい一湯を出候事、……	「一会集」にあり、「閑夜茶話」にもあり	
50	56	◎夜咄・夜込ノ二会者、炭を不致前ニ、先薄茶……	「をり草」の「夜会」で採用	
51	100	◎茶掃様、杉なり山なり如何……	未詳	
52	101	◎長盆大円盆者、台子ニ限り候哉……	未詳	
53	102	◎遠州流ニ小円盆と申而、肩衝を乗候盆有之候……	未詳	
54	99	◎水指棚袋棚等ニ遣服紗むすひて飾り候事……	未詳	井伊22598：酉2月17日付(嘉永2 年) * №51～70まで20ヶ条全部を収録。
55	94	◎当流七種蓋置ハ……	未詳	
56	92	◎七種蓋置ノ内こほし……	未詳	
57	93	◎竹之蓋置、台子長板ニハ不用……	未詳	
58	95	◎茶湯之節ハ、釜敷紙ヲ今ハ是非用候得共……	「一会集」には釜敷として釜敷紙・組物 を併記	
59	138	◎石州好之扇子有之候由、……	未詳	
60	137	◎茶抄筒ヲ入候袋色々ニ致シ有之候、……	未詳	
61	141	○蕨簪・蕨簪寸法拵様……	未詳	

62	37	◎易戸ハ何レ之窓ニも用意致置事……	「をり草」に「夜込」に採用あり	
63	32	◎茶湯之節、初入ニハ亭主肩衣着シ、後入点茶……	「一会集」これを採用せず	
64	31	◎足袋ハ暑寒共必ス用事ト心得候、……	「一会集」に採用	
65	39	◎松葉ハ初冬ニ敷候より春揚ケ候迄敷カヘ不申……	「一会集」に採用	
66	40	◎松無キ露地ニハ松葉敷不申由、……	「一会集」に採用	
67	54	◎夜会ニ客座入致シ懸物或ハ花ヲ見候為……	「をり草」の「夜込」で採用	
68	55	◎席中ニテ短檠之油ツキ候事、……	「をり草」の「夜会」で採用、但し貼り紙で追加	
69	44	◎亭主迎ニ出、立帰り候節者、たとへ……	「一会集」に採用	
70	57	◎待合鳴物敬客ニ者不用、亭主出る案内致候由、……	「一会集」では「草庵清規」として必ず「鳴物」を用いると強調→真懷石と関係するか	
71	20	◎台子七飾ト云ハ何々ヲ申候哉	未詳	井伊22628：年未詳3月21日付(嘉永2年) * №71～90まで20ヶ条全部を収録。 * この簡条、千家紋々斎荒居善長筆記の「扱物筆記抜書」(30644)にあり。 * この簡条、119と併せて清書の23となる。
72	21	◎竹台子及台子ニ者奈良風呂飾焼物之水指……	未詳	
73	53	◎残火跡見ノ二会差別、当流ニも有之候哉、……	「をり草」において、明確に区別する	
74	86	◎丸板者、鉄風呂……	未詳	
75	90	◎一閑人蓋置人形向方如何	未詳	
76	52	◎千家ニハ堂腰懸ト申モノ有之候……	「一会集」には「堂腰懸」を載せる	
77	43	◎小座敷杯を待合ニ用候時ハ亭主縁際迄も……	未詳	
78	42	◎亭主迎之事、中潜リニ而も猿戸ニ而も外へ……	「一会集」に關係記事有り	
79	50	◎石州好之門座有之候哉	未詳	
80	49	◎大雪ニテ飛石埋レ候節、仕方如何	「をり草」にあるが、採用されず	
81	79	◎自在者、老人ニ限り候哉、……	未詳	
82	80	◎道幸、是又老人斗用候哉	未詳	
83	81	◎紅服紗、老人少人用候と承り申候、婦人ニても……	「閑夜茶話」にあり	
84	82	◎天目ヲ台ニノセス平手前ニ致候事有之哉	未詳	
85	83	◎他流ニ台茶碗と申而、常ノ茶碗ヲ台ニノセ点茶致候事……	「無盆唐物点」にあり	
86	84	◎茶巾、今ハ皆々端縫ヲ致用候得共、……	「茶道下留」にあり	
87	5	◎当世茶人之懷石附ヲ見候ニ、数寄屋飾付之外ニ……	「一会集」に採用	
88	* 23	◎数寄屋ノ床柱、又者道具畳隅柱ニ花入之……		
89	6	◎織部百ヶ条ニ三釘之時、先中ヲカケ……	未詳	
90	7	◎同人ノ説ニ貴人相伴候節、門座ヲ飛石ニ下シスハリ居候、……	「一会集」採用せず	
91	一	○風呂茶湯者、席入直ニ懷石ヲ出シ、済テ炭置候事故……		井伊22608：西4月17日付(嘉永2年) * №91～99まで10ヶ条の内、9ヶ条を収録。
92	34	◎席中へ下ヶ物者不用事ニ哉、……	「一会集」に採用	
93	4	◎遠州ニ而者菓子ノ跡ニ必水栗出候、石州ニ者……	「一会集」に採用	
94	78	◎釜之仕付銀、炭之節者、服紗ニ而上下シ致候、点茶之節ハ会釈如何哉	未詳	
95	85	◎重茶碗ニ尊卑之茶巾ニツ持出、仕廻ニ一ツツ……	未詳	

96	3	◎三百ヶ条ニ、数寄之賞花之事、諸説利休めさし柳と定メ……	「一会集」に採用	* 99の後に「一先師之言ニ茶者虚ニして実に之道と云々……」の箇条あり。
97	—	○三百ヶ条ニ、塗縁春者しら縁ニ取替ル事……（抹消）	未詳 「入門記」に通じる	
98	1	◎三百ヶ条ニ、茶湯者仏道歌道ヲ兼タル由申伝、……		
99	2	◎本家ニ者、石州之事茶ハ専ラ武ト申唱候、……		
100	8	◎風炉ニ而釜之懸下シニ必膝立候哉、……	未詳	井伊22626：閏4月16日付（嘉永2年） * №100～109まで10ヶ条全部を収録。
101	9	◎風炉之前土器、寒冷之間者、……	未詳	
102	71	◎奈良風炉ノ中、品々申伝候、古法何レヲ……	「茶道下留」にあり	
103	70	◎炉中ノ灰、冬春ノ差別如何哉、……	「灰の書」にあるも「当流」では「ふくさ灰」のみとする	
104	—	○炉ノ茶湯、炭手前ノ節、炉中拝見者炉辺へ打ヨリ見、……	未詳 未詳 未詳	
105	22	◎風炉ヲ炉之跡ニ居へ、風炉ニ而釣釜致候事、……		
106	133	◎筒茶碗ノフカキニハ、長茶筥用候哉、……		
107	134	◎筒茶碗ニ茶筥茶杓仕込候ニ者、千家ノ如ク仕込候トモ申、……		
108	30	◎花所望之時、客花入候ハ、退出之節、必揚ケ置……	「をり草」に「花所望」のことあるが、これを採用せず、また「一会集」では「花所望」は「別巻ニ記す」とあり	
109	35	◎むかしハ懷石たへ切候事候、……	「一会集」にあるが、骨などは蓋物に残し置くとある	
110	103	◎数寄屋ニてノ盆点者全く唐物拝領物等茶入賞翫ニ而……	「無盆唐物点」などにあり	井伊22633：年月日未詳（嘉永2年頃） * №110～下巻129まで20ヶ条全部を収録。 * 88と併せて清書の23となる。
111	—	◎風炉ニ而濃茶之時、中仕舞の釜の蓋……	「一会集」に採用	
112	—	○風炉ニて濃茶の時、水指之ふた茶ヲ汲入候とき、		
113	33	◎今世出家之茶人、茶服杯といひて袈裟衣者とり、長合羽の如き……		
114	—	○婦人こと立候茶湯之節、亭主ニても客ニても……	「一会集」に硯箱のことあり 未詳 「閑夜茶話」にあり 未詳 未詳 未詳 「長板九段」に関係あり 未詳 未詳 未詳 「初十箇条」にあり、「茶道下留」の「当流茶事稽古次第」に追記される	
115	153	○婦人吸茶之節、男子之如ク只指ニ而一寸拭ひ候はかりニては如何……		
116	51	◎待合腰懸ニ硯箱出し候節、常飾り付之通奉書敷可申候哉、		
117	104	◎茶入之巢蓋置様、巢を客付ニおき、茶入ニ景有るハ巢を勝手の方ニ…		
118	105	◎褌之袋ニ大津袋といふもの当流にても用ひ候哉		
119	* 23	◎懸物を懸て床柱ニ花入をかけ花を入候者、如何様之節致候事哉		
120	24	◎道具置之隅ニ柳釘といふ釘アリ、……		
121	77	◎大羽釜を炉ニかけ候ニ、透木を……		
122	87	◎長板九段いつれニても濃茶点候て不替哉、		
123	89	◎穗屋蓋置遣候節、釜中ふた致候節者……		
124	88	◎台子長板等ニ而、板立飾り有之候ハ、……		
125	91	◎平手前ニ柄杓置かたき蓋置、釜中蓋ノ時……		
126	98	◎しほり茶巾と申而、茶巾水ニひたし……		

表Ⅰ—② 「聞書控」下之巻

番号	清書	条 文 頭 書	引 用 箇 所	「茶湯尋書」との対応関係
127	142	○宗閑先生工夫之薫物合方有之様承り居候、……	「茶道下留」に採用	
128	143	◎宗閑先生風炉ニ炷被申候香木者、伽羅沈香……	未詳	
129	144	◎風炉ニ炷候香木寸法有之候哉、……	「茶道下留」にあり	
130	97	◎五ツ羽と申もの、真の物ニて石州も……	未詳	現存せず（嘉永2年頃）
131	152	◎舟之花入、床ノ内ニ釣候釘、何レニ打候かよろしく哉、……	未詳	
132	113	◎風呂之茶湯、初座之障子を明け、後座ハ障子……	「一会集」の「数寄屋掃除并簾」にあり	
133	110	◎茶湯初入之節、熨斗を出す事、……	「一会集」の「初入」にあり採用する	
134	111	◎自然、長上下ニて点前いたし候ニ者、……	未詳	
135	112	◎古茶所之図ニ、上座ノ上ノ方ニ給仕口付たる茶所有之候、……	未詳	
136	117	◎濃茶一順給廻し、詰之者御茶はらひ……	「一会集」の「濃茶点前」に採用する	
137	118	◎薄茶之そゞき湯、亭主客へ挨拶之上たへ候事、……	未詳	
138	114	◎酒を不出懷石ニハ、香之物を膳ニ付るといふ事……	未詳	
139	116	◎沓脱石刀掛石、并ニ軒下ニハ水を不打と有之書物……	「一会集」の「腰懸の石……」にあり	
140	115	◎腰懸ニ其日之客付を認メ出し置候と申事、……	「一会集」では「決而不致事」と否定	
141	129	◎割鑢之扱、釜ニ通し候時、割目を外ニいたし……	未詳	
142	149	◎後炭客ニ所望いたす時者、亭主釜を上ケ炉辺をはき……	未詳	
143	—	○石州も水栗を被出候由、水栗ノなほし形定り有之候哉		
144	—	○石州好ミの菓子ハ無之哉		
145	147	◎台子之炭ニハ枝炭を遣はすといふ事……	未詳	
146	—	○茶湯初入ニ熨斗を出す事、初之客、……（133と同じため抹消される）		
147	—	○自然、長上下ニて点前……（134と同じため抹消される）		
148	148	◎大香合ニ小香合入子ニいたし……	「茶道下留」ではこの説採用せず	
149	150	○亭主初之薫物一種たきて……	「をり草」・「初十箇条」に採用あり	
150	155	○台子先之屏風ハ六枚折小屏風……		
151	—	○客花所望ニ合ひ席上ニて花入候節……		
152	128	◎鑢を棚ニ飾候時ハ、鑢台ノ上ニ乗せ飾りて……	未詳	
153	119	◎茶所之軒ニ刀掛あれハ、客は迄も帯刀いたし、露地入すへし……	「一会集」で採用	
154	120	◎初入ニ懸物をかけ後入ニ香炉、又は盆石之類飾り……	未詳	
155	121	◎点前ノ後、水さして釜の湯かへしいたすハ何之為ニ候哉	未詳	
156	122	◎釣鉄灯籠ハ、昼ハ取入候事と承り候、然れハクサリモはつし可申哉	未詳	

表Ⅰ—③ 「聞書清書」のNo.155迄の内「聞書控」上・下之巻・「茶湯尋書」に見られないもの

番号	清書	条 文 頭 書	引 用 箇 所	「茶湯尋書」との対応関係
なし	36	宗関先生、平日点茶被致候ニ者、如何之着服候哉、……	「一会集」にあるが、羽織は法体の着服を原則とする	現存せず（嘉永2年頃）
	47	揚簀戸ハ、外の方へあけ候か、又内の方へあけ候か	未詳	
	72	長炉の灰者、ふくさ灰かき上ケニてよろしくや、……	「灰の書」に採用	
	76	水滴茶入之口、何方へ向ケ候哉	未詳	
	86	丸板者、鉄風炉ニ取合候と申候、左様ニて宜候哉	未詳	
	130	大鑕之あしらいとて有之候哉	未詳	
	131	火箸曲之鑕あしらい有之哉	未詳	
	135	大平茶碗ニハ茶杓如何組入候哉	未詳	
	123	台目の席ニ隅棚なきニハ小形なる水指棚置付候事ハ無之哉	未詳	
	124	袋棚置付茶湯之節、客袋之内をあけ見候と申事如何	未詳	
	125	道幸も同様、明けて見ると申事如何	未詳	
	126	道幸点之時、仕舞ニ水指取かた付、水次を指出、水つき候ニハ不及……	未詳	
	127	懐たんすも同様、蓋を明けて見ると申事如何	未詳	
	139	石州好臘燭本形懸目如何	未詳	
	140	石州好ふすま紙ニ水玉紙と申本形如何	未詳	
	151	客へ花所望いたしたる時、和巾上ニテ花ニ水打候事ハ如何いたし……	「をり草」にあるが詳しく触れず	

表Ⅰ—④ 「聞書清書」

番号	清書	条 文 頭 書	引 用 箇 所	「茶湯尋書」との対応関係
なし	156	懸物外題飾之時ハ、先つ飾り之儘拝見致し……	「をり草」の「跡見会」にあり	井伊25630：年未詳11月21日付（安政3年） * No.156～165まで10ヶ条全部を収録。 * 包紙上書「茶事尋書」
	157	拝領之釜を抜き候ニハ……	未詳	
	158	拝領之花入ハ水はかり入、花を不入方よろしく哉	未詳	
	159	拝領之ふくさハ、濃茶出し服紗ニ用候……	未詳	
	160	拝領之香木、薫物を用ひ候ニ者、……	未詳	
	161	当日の客より花到来之節、……	「一会集」の「客より贈り物之事」に採用、「をり草」の「夜会」にもあり	
	162	広間点の心得如何候哉	「初十箇条」に「広間点」あり、茶道下留にあり採用	
	163	付薄之時ハ、濃茶を点し湯すすぎいたし……	「初十箇条」の「附薄」で一部採用するが、客より所望は否定する	
	164	真之ふくき包の時、ふくさ懐中いたし候節いかゞ……	「初十箇条」の「ふくき包」では、遣袱紗は腰につけるとし、この説を採用せず	
	165	茶筌飾りニて、濃茶を点候ニハ、茶碗へ茶入を入候……	未詳	

なし	166	袋切茶入＝取合如何様＝てよろしく哉	未詳	井伊25350：已正月12日付(安政4年) * №166～186まで24ヶ条全部を収録。 **関連資料：井伊25315(控)
	167	炉縁＝茶杓置候事者古書＝見へたり、……(図入り)	未詳	
	168	炉縁＝茶巾置候事も有之候哉	未詳	
	169	中次敷紙之伝、諸流＝重んじ候者、何之子細＝候哉	「茶道下留」の「当流茶事稽古次第」に 「中次敷紙之伝」あり 「茶道下留」・「閑夜茶話」にあり	
	170	石洲流＝服之伝と申事有之哉	未詳	
	171	口切之外、茶前の床＝壺を飾り候＝ハ、茶の詰りたる壺を……	未詳	
	172	釣舟、冬も用ひ候てくるしからず哉	未詳	
	173	釣舟手桶の水指運び手前の節、取り手＝手巾を……	未詳	
	174	底取御見せ候へと客より所望いたし候事他流＝有之、……	「初十箇条」に「底取炭所望」あり	
	175	盆点之とき服紗を乞出す事もあり哉	未詳	
	176	松之木盆＝て盆点の時、常のこく盆拭ひ候哉	未詳	
	177	或書＝盆点之跡＝て其道具＝て薄茶点る……	未詳	
	178	天目台＝服紗を添出す事、他流＝あり、是ハ台ニのせ……	未詳	
	179	薬罐点といふ事有之哉	未詳	
	180	囲炉裏＝も透木を置、大羽釜を懸ケ候事、……	「茶道下留」に「透木寸法」のことあり	* 尋書には、180の後に「一風炉 ニて夜の点利……」の一条あり。
	181	石州作の茶杓＝も節下り＝て鶴首など……	未詳	
	182	茶碗をこほし＝入子＝いたし候手前有之哉	「初十箇条」でこの説を採用せず、敢えて行うとする	
	183	駅路の蓋置扱方有之哉	未詳	
	184	禪僧を招請の節、懷石に酒を不出……	未詳	
	185	待合ならし物、場所＝より腰懸を……	未詳	
	186	待合腰懸＝掛灯台をかけ……	「をり草」に採用	
なし	187	炉風炉灯火置所如何、手燭はいづれ＝置候……	「をり草」では「惣して、灯火・手燭の 置所は、急度定りたる事なし、兎角明り の利き加減＝より指引すへし」とする	井伊25353：已2月21日付(安政4年) * №187～199までの13ヶ条。 **包紙上書「已二月廿一日出、同 三月廿七日着、△茶道尋書、内二 ヶ条再問すへし」
	188	広間台子之主意ハ如何、……	未詳	
	189	懸物と花取合之事、たとへハ……	未詳	
	190	万年青・南てんななどの実物はかり花＝入候てもよろしく哉、……	未詳	
	191	雪中＝赤き花を入候と申説、然るへからさるやう＝候、……	「をり草」では「雪中＝花を入るゝ事、 古来用捨する由、梅ハ興＝よると云々、 尤 白き花を不入、赤き花も当流＝而は 好まず、……」とする 「閑夜茶話」にあり	
	192	遠州流＝紅ノ茶巾を雪中＝遣ひ候よし、……	未詳	
	193	書院の飾り＝塵壺と申もの、利休には床棚などニハ飾り申さず……	未詳	
	194	或書＝本式書院、萩＝ハ卓下花生置事なし、……	未詳	
	195	利休ハ竹の床柱おもしろからすと申候由、侘＝ハ石州にも……	未詳	
				* 尋書には、195の後に「一夏ハ 平茶碗……」の一条あり。

	196	腰懸へ出したる多葉粉盆・火鉢を、薄茶のとき席へ出して……	「一会集」・「をり草」では採用せず	
	197	干菓子ハ一鉢退出之時分、客何レも配分いたし持帰り……	未詳	
	198	取合せものニ足打の膳を懷石ニ用ひ候てもよろしく哉	「一会集」貴客の節も常の折敷のうちへ ……よろしき也	
	199	流祖石州、万里一条鉄之語を以て茶事の極意せらるゝ事者、……	「閑夜茶話」に「万里一条鉄」のこと	
なし	200	組物之炭取ニ籠の花入ハ指合用ひかたく哉	未詳	井伊25349：已4月26日付(安政4年) * №200～214まで15ヶ条全部を収録。 * 関連資料：井伊25351(包紙上書「已四月廿六日出、万事尋之下書」)
	201	棚飾リニ鳥の香合ニ三羽飾り付てハ指合可申哉	未詳	
	202	柄杓かけの釘ニ懸灯台をかけ候事、……	「をり草」に「木灯台・懸灯台ハ至而小間ニ用ゆるもの也、懸灯台ハ柄杓懸の釘にかくる、又灯火を床ニ置く事もあり」	
	203	木地片口の水次ニハ、蓋置を不用、……	未詳	
	204	後炭の節、灰器へ香合を入れるニ、香合の蓋とり……	「茶道下留」に「○古書ニ灰炮録ノ図有り、後炭炮録灰サシ、此灰サシニ香合入テ出ス、尤香合ノ蓋取、勝手ニ残シ、身ハカリ入レ出也、観云、香合ノ蓋ヲ勝手ニ残スト云コト可追考」	
	205	席上ニて短檠ニ油次き候事ハ如何いたし宜く哉	「をり草」に「一席中ハ短檠・竹檠之類灯すへし、灯心五筋か七筋、当流ニてハばら灯心を用ゆ、もし余り乱れたらハ其内巻筋、先ニてむすひてもよし、長サハ短檠ハ箱まで、竹檠ハ筋迄、猶又短檠ハ箱の上ニ奉書を敷、下皿をのせ、竹の楊枝一本置く也、箱の内ニハ油次を入置く」	
	206	芋茶杓、常の手前ニ用ひてもよろしく哉、……	未詳	
	207	茶入茶碗御物袋ニ入たるを、由緒もあらハ其袋の儘ニて席上へ持出し…	未詳	
	208	雪中飛石の雪を払ひても、又ふり……	「をり草」に「一深雪のときハ席入中、幾度となく掃払ふへし、雪かきをもちてあけてもよし、又、飛石通りの雪を踏付て飛石のことくさんたわらを並へ置く事もあり」	
	209	腰懸之板木、亦者木魚など釣置事、……	「一会集」に「一腰懸の版木槌とも心を付へし、内外腰懸あらハ、外腰懸にかゝるなり」 「一会集」に「一腰懸ニ客落付たらハ、詰正客へ挨拶して版木を可打、又ハ木魚ニても同じ、尤相伴之衆邪魔ニなるへき所ならハ版をうつうちハ腰懸をはなれ居	

	210	軒下の刀掛ニ丸竹二本切かきをしたる刀掛，流義ニもいたし候事ニ哉	へし， 当流打様 △一△ △ △ △ △ △ △	
	211	床ニ入置たる花を客退出のとき所望あらは，花入ともニ勝手……	未詳	
	212	古き懷紙詠草など表具無之品を床ニかけんと思ふニ，新ニ表具いたし…	未詳	
	213	茶席の床ニ小幅の対の懸物をかけ候てもよろしく哉	未詳	
	214	置船と云ハ唐銅の舟を床ニ薄板を敷，其上ニおきて……	未詳	
なし	215	二種点之時，後の茶吞たる茶碗をも始ノ節のことく……	未詳	井伊25629：年未詳6月8日付(安政4年) * №215～224まで10ヶ条全部を収録。
	216	懸物表具色の取合上下薄く中縁濃き方可然哉，……	未詳	
	217	一文字風帯と中縁と者，何レノ方濃きかよろしく哉	未詳	
	218	夏夜短檠の灯火ニ虫あつまり候，このふせき何そ短檠の覆ひニても……	未詳	
	219	風呂の茶湯ニ後炭をいたさず，初の一炭ニても不苦哉，……	「一会集」に「いつも中立の内ニさし火 杯致は大なる僻事也， 初めの挨拶すみて懷石を出シ，次ニ炭 を直し中立し，程無く後入，」 「をり草」に「一花のかほりに置香炉・ 釣香炉，又ハ如意・払子等，飾る事もあり， 盆石を置くもよし」	
	220	後座ニ釣払子，又者如意をもつり，……	未詳	
	221	濃茶の服加減，大凡一人前懸目如何程と云事，石州の定め有之哉	未詳	「一会集」に「亭主懷中物，小菊紙一 折・釜敷紙・和巾二つ 一つは腰ニ付， 今一つは懷中」 未詳
	222	炭手前するとき，鑲を懷中いたし行候てもよろしく哉，……	未詳	
	223	遠州流ニ遣ひ和巾を時々懷中いたし候，石州流ニも遣ひ和巾懷中の事…	未詳	
	224	懸物のかほリニ床ニ巻物・冊の物・手鑑等飾り候てハ如何可有哉，……	未詳	
なし	225	当流ニ額之好有之哉（額寸法入り図あり）	「茶道下留」にあり	現存せず。*「茶湯亭主心得書」の寸法と同じ。